

《鼎談》

# 田辺開校にあたって

木 枝 燦（大学長）

岡 野 久 二（女子大学長）

北 垣 宗 治（大学文学部教授）

北垣 今日は「田辺開学にあたって」ということで、同志社大学と同志社女子大学の学長先生に私のほうからお聞きするという形になるわけでございますが、最初に田辺開校を前にしてのご感想をうかがうことができたら有難いと存じます。木枝先生はこの三月末で大学長としての任期を全うされるわけでございます。これまで公式的な場面でいろいろなご発言がございましたが、このさいこれだけほげひ言い残しておきたいというようなことも含めてお話し頂きたいと存じます。また先生は早くから教育研究条件整備委員会副委員長としてご尽力になり、大学長として三年間ずっと田辺開校をめざしてもっぱら努力を傾けてこられましたので、さぞ感慨無量なものがあろうかと存じます。それではどうぞ。

## 新しい価値を生み出す空間

木枝 田辺の土地を入手しましてからずいぶんな時間が経過しているわけですが、教育研究条件整備委員会の副委員長に指名されまして、そのあとの二年間ぐらいがやはりいちばんしんどかったように思います。そのとき手伝ってくれたのは木村君や西村君でござい



北垣宗治氏

ましたけれども、なかなかこちらの希望どおり大学が田辺のほうを向いていただけじゃなかった。率直に言ってそういう感じがいたしません。

その後学長になりまして、それまでいろいろ部門改善委員会の答申がたくさん出ておりましたが、これはお金という面を度外視してまとめられたものでありまして、それを教学の面については法学部の山本教授を委員長とする教学検討委員会、それからお金の面は商学部の吉武先生を委員長とする財政計画検討委員会、この両委員会が手をつないで短期間で現在の田辺の実施計画の基礎を築いていただいた。これは非常にありがたいことだと感謝しております。

その主なものは、六十一年四月から第一部

の一、二年次開校、これは非常に思い切った結論であろうかと思うのですが、それから百八十億円という枠は、両委員会が相互に了解してその路線を定めていただいた。お金のほうは吉武先生に申しわけないのですが、ずいぶんふくれたわけです。私は純粹の教学に対して百八十億、そのほかに学生諸君の課外体育に対する施設として二十億、合計二百億をめぐらしておりました。しかしこの際、先行投資ということとばが悪いのですが、いろいろなご要求を入れておいて、将来に余裕を残すということと現在の二百三十八億という枠になったんですが、この前も建物の中へ入って見たときに、これは日建設計の責任者のこととばですが、一挙にやられたために二百三十八億でできたんですと、お世辞かもしれませんが、そういうことを聞いてやや安心をいたしました。

私は自分の専門上、いろんな活動をする一つの制限としては時間と空間ということとを絶えず意識するわけですが、時間としては同志社は百十一年、さらにその中で若い人たちが、あるいはもちろん先生方、職員の方々のご自身の時間をずっと持っておられまして、空間



としては、田辺を新しい価値を生み出す空間として確保し準備させていただいたというふうに考えております。もちろん大学設置基準等の問題もありますけれども、やはりそこで新しい価値をつくり出していただくために十分な空間、たとえば剣道場とか柔道場とかを含めて、そういう空間であることを皆さんもご理解いただいで、十分に活用していただきたいと、こう願っております。感想としてはそういうところでございます。

**北垣** ありがとうございます。岡野先生、女子大学のほうのご計画ですが、その大略をも含めそのご感想をお願いいたします。

**岡野** 女子大学としましては、いま建物がだいたいでき上がったという状況になってきますと、やっとたどりついたというような気



木枝 燦氏

持ちですね。来年四月開校します短期大学は、検討をはじめたのが昭和四十七年からですが、それでも、それがやっと実を結んだという状況でございます。その間いろいろ紆余曲折はありました。女子大は六十一年四月から短期大学部を新設し、それから音楽学科を田辺に移転いたします。六十三年から学部 of 英文学科、家政学部の一年、二年の移転を開始するという計画で、だいたい現在順調に進んでおりますから、計画どおりやっていけるのじゃないかと思っております。

**北垣** そういたしますと来年の四月段階では、短期大学部の一年生と音楽学科の一、二、三、四年生に、女子大としてはあちらで授業なさるということですね。

**岡野** そういうことです。

**北垣** 短期大学部のメリットをどういうふうにお考えになっておりますか。そのへんの哲学を披瀝していただけますと幸いです。

**女子大短期大学のメリット**

**岡野** 同社に現在、幼稚園から大学まで含めて十の学校がありますね。その中でないのが小学校と短期大学です。共学の短期大学

は昭和二十五年から七年間ぐらい、ございましたですね。しかし女子の短期大学というのはなかった。

短期大学のメリットということになりますと、やはり実学というんですか、現在の女子大学はリベラルアーツを主体にした教育ということではじまっているわけですが、短期大学部は職業的な訓練を、しかも二年間にやらなきゃいけないといったことがありますので、こんどつくるのは英米語科と日本語日本文学科ですけれども、英米語科の場合には英語を話し、書き、聞くことができます。それにタイプライターとかコンピューターといったものを全員にやらせる。日本語日本文学科のほうも、なぜ国文科にせずに日本語日本文学科というようなことばを使っているのかといいますと、日本の文化というものを、日本語や日本文学を通して、もう少し幅の広い世界的な価値体系の中で、できれば海外にも伝えることができるような教育をしたいというところで、あえてつけたわけですが、その場合もやはりそれだけじゃなくて、タイブとかコンピューターもやらせていきたい。そして世に出てすぐ役に立つ教育をやりたい。



岡野久二氏

こうと、こんなことを考えているのです。

**北垣** そうすると日本語日本文学科はコンピュータ、ワープロといったものを含めて実学をめざし、会社に入ってもすぐに使えるような学生さんを養成なさることですね。

**岡野** 学部と短期大学部ではやはり教育目標が違わうわけですから、それをはっきりさせたいということですね。

**北垣** 入学志望者は、田辺に通いやすい地域の人を予想していらっしやいますか。

**岡野** いや日本全国からのつもりでいるのですけれども、実際どういう結果になりますか、募集してみないとわかりません。

**北垣** 二年の短期大学部卒業生は、希望すれば女子大学の四年制あるいは共学のほう

に、いままでよりはもっと簡単にはいれるようなことも、将来の予定の中にございますか。

**岡野** 英米語科の場合は、現在学部で英文学科がありますので受け皿がありますから、希望する人は推薦入学という形もついでいこうと思っっているのですけれども、日本語日本文学科の場合は現在すぐに受け皿がありませんので、いま同大の国文学専攻のほうといろご相談しているのですけれども、将来女子大学のほうで日本文化学科をつくる計画をしています。それができれば、その中で日本語日本文学科の学生を受け入れていこうという計画なんですから、六十三年に日本文化学科をつくろうと思っっていますから、その間の二年間ぐらいを、できたら同大のほうで何かお考えいただけたらと思っっているのです。ただいま検討中で、木枝先生にお願いに行くとところまでいってありませんので(笑)。

**北垣** 文学部文化学科の国文学専攻は最近ではたいへんオープンな専攻ですから、喜んで乗ったださるのではないかというふうには私は見えていますけれども。

**岡野** そうですか。これは三年編入という

形になりますので、その場合にどういう形の推薦制度がとれるのか、同大のほうでもいろいろ制度があるのでしようから、そのへんのところはそう簡単にはいかんのかなにかと思っっているのですが。

**北垣** ところで来年四月になりますと今出川と田辺との二校地になります。もちろん事務のほうでは大学の場合、すでにそのつもりで新しいオフィスでの仕事が十一月からスタートしているわけですが、これから予想もしないようなことが、いろんな面で見ると思われます。こういった連絡・連携・機能分担といった観点からの見通しを木枝先生お話しただけじゃないでしょうか。

#### 両校地間の連絡

**木枝** いまたとえば先生方で田辺に研究室をお持ちの方が教授会等でこちらへこられるとか、あるいは何らかの会議があるとか、そういうことに対しては電車賃等をどうするかというふうなことをお考えいただいております。結局、学部長など所属長の、公的業務であるというご判断に基づくと思われます。それによって現行の旅費規程などを適用するとい

うことになっていくと思いますが、実はこれは大問題なんです。教職員それから学生もそうなんです。学生も正課はもちろんですが一、二年は向こうでやるわけですが、向こうにしかない一、二年次配当科目を落とした学生、それから課外活動の学生諸君は、向こうへ行ったり帰ってきたり、いろんなことが出てくると思います。全部をいまからきちっと考えることはちょっとむずかしいのですけれども、マイナス面を凌駕して、先ほど言ったような意義を生かしていただくように、これはもう言わなくても皆さんご努力いただける信頼しておるわけです。東京都内にありました諸大学が遠い所へ第二キャンパスをつくったりしておりますが、何とかやっておるわけで、連絡・連携・機能の分担ということで、かななりご不自由を最初はかけなくちゃならないと思います。

大学の部長会等でのご意見の中には、むしろ田辺を本拠と考えることが必要ではないか。ですからしかるべき長はこちらにおられるにしても、再三田辺に行かれることを考えていただきたい。職員について言いますと、その長が自分の近所にいないということは士

気に関係するというお話で、私は責任者はしかるべく田辺のほうにお出まじたいだきたいということ、機会あることにお願ひしております。

まだ細部については検討中でございます。その結果はまだ岡野先生のほうに行くところまでいってないかと思いますが、ご相談をさせていただきます。

北垣 いまの点は女子大学はどういうようにお考えでしょうか。

岡野 女子大は先ほど申し上げましたように、来年四月からは短期大学と音楽学科だけですから、いま同大が考えておられるような分室方式はとらない。田辺事務室というのですべてこなししていきます。六十三年に学部の一、二年が移転を開始いたしますと、その段階では田辺のほうが学生数が多くなります。だからどちらが分室になるのか。その時点でもう少し細分化したものを考えていこうと思えます。いまは過渡期的な形でやっていこうと思っております。

北垣 四月からは学長として田辺に週何回ぐらいいらっしゃるおつもりですか。

岡野 最低一回か二回ぐらいは行かなきゃ

と思っておりますけど(笑)。

木枝 私は金曜日、土曜日にちゃんと時間割が入っております。(笑)

岡野 向こうで授業をお持ちになるのですか。

木枝 はい。一年生、二年生です。

北垣 もういま時間割をつくっていますからね。

木枝 ちゃんと印刷してあります。知らんうちに入っております。結構だと思えます。

#### 両大学の相互乗り入れ

北垣 ここで大学と女子大学との教育・研究上の協力態勢、相互乗り入れといったこととお伺いしとうございます。いま伺っておりますと女子大学の体制がそろいますのは昭和六十三年からですから、いまずぐにということじゃないのですが、たとえば音楽が一つの例になるかと思うのです。同志社大学も総合大学でありながら音楽を正規のカリキュラムの中で非常に軽視してまいりました。音楽学概論というのが文学部の美学専攻の選択科目の中に入っている程度にすぎません。アメリカ

カの大学では音楽はだいたいなコースになっておりまして、アーモストなんかでも、音楽学科があり、ピアノであろうが作曲であろうが、あるいは西洋古典音楽であろうが非常に重視しておりますのに、同志社大学では音楽は学問としての市民権を得てないという感じがしますね。女子大学では音楽をだいにしておられるのですが、将来相互乗り入れ、あるいは大学生が女子大学の音楽の科目を取らせていただくことは可能でしょうか。それとも男性はやはり汚らわしいものであるから、来てはいかんという考え方をなさるのでしようか、岡野先生。(笑)

岡野 いやいやそんなことはありません。いまの北垣先生の言っておられるような相互乗り入れというのは、学生間の学科目のということでですけど、これは女子大の場合もいろいろ話題になっているんです。田辺に学部のある学生が行った場合に、同志社大学の講義を女子大の学生も取れるというような形は考えられないものだろうか。しかしその場合に、いまおっしゃったように女子大のほうも同大の学生を対象に何かの学科目をやるという形にしないと、われわれのほうだけ聴かせてく

ださいというのは、同大のほうもうんとはおっしゃらないだろうかというような話はあるんです。

だから学生間の相互乗り入れということで、東京なんかの場合を考えてみますと、学部じゃなくて大学院じゃないでしょうか、まずはじめるとしますと。たとえば同大の英文学科と女子大の英文学科の大学院の講座をどちらが取れるという形ですね。実際いま同大のほうから先生方に来ていただいていますし、うちのほうからも行っておられますから、むしろあそこに先生がおられて、学生のほうから聴きにくるということをやるとすれば大学院の段階でまずはじめてみたらどうかと考えているのですけれども。

それから教員の相互乗り入れは、いまこちらでもやっていたら、女子大のほうも相応お世話になっているわけですが、これは向こうへ参りましても、こんどの短期大学の場合も同大の錚々たる先生方が講義に来てくださることになっておりまして、非常に喜んでおります。

北垣 大学、女子大学を比べた場合に、もし考えられるとすればアンダーグラデュエー

トの場合は、どちらかにないものを取らせていただくといったところからスタートすべきじゃないでしょうか。大学院のことはいまおっしゃったとおりだと思っております。そうなりますと、男の学生の中で家政学に興味を持つというようなのが将来出てきた場合、それも取らせていただくというようなことはおもしろいのじゃないか。男は家政学とは関係ないというのは古い考え方であって、二十一世紀に目を向けるならそういう男子学生が出てきても不思議はないと私は思いますし、そういうことも将来はオープンでやっていたらだいたいと思います。それから女子大の学生が工学部の科目などを取らせていただく時期がくることは、将来のためにはいいのじゃないでしょうか。

今出川校地では、これはデントン先生の偉大な伝統ではないかと私は勝手に想像しておりますが、女子部と共学との間の壁は非常に厚かったわけでして、あそこを通過するのにならなくって心の痛みを感じなくてはならなかった時代に育った人間は、なかなかそういう発想はできないのですが、こんどの田辺はそういう田垣根ではなく、開かれた一つのコミ

ユニティーとしての同志社を考えると、いったことを期待したいわけです。

木枝 音楽が大学における市民権を持っていないというお考えは、私もかねがね持っていました。ヨーロッパで大学ができた古い時代に、哲学とか医学とか、古典語、数学とともに音楽が入っておいりましたね。ですから音楽については早い時期に、大学の学生が女子大の講義を聴く。ピアノを一对一で教えていただくというようなことまでは、とてもいかんと思えますけれども、講義を聴かせて頂く程度には門戸を開いていただきたいと私も思っています。そういう講義であれば、田辺の大学側の教室でおやりいただいてもいいと思えますね。

北垣 こういった点では将来は明るいですね。

岡野 そうですね。何かのくふうをして……

木枝 随意科目といったものでスタートして、ヘンデルやバッハあたりの音楽から聴かせながら解説していただくといったようなものができれば、私も聴きに行きたいと思えますね。

岡野 しかし同志社大学の場合は、音楽関係の学科目がないにもかかわらず、グリークラブとか同志社交響楽団とか、なかなか昔からの伝統のある音楽の団体がありますね。

北垣 課外活動で補っている面は大いにあります。

木枝 相当な努力を注いでおりますので、それが単位数にでも反映したらいいなと思う(笑)。京阪で通っております、あるとき隣に座った学生が、淀屋橋からすぐ小型のオーケストラの楽譜を一生懸命に読んでいるわけですね。「あなた指揮者でも志望しているのか」と話しまして、どこか学生だと言ったら同志社大学だということです。赤線ひっぱりたりしてね。何かに所属しているのかと言ったら、クラブには全然入っていない、独学しているんだというので、ちょっと感心しましたね。

北垣 図書館も、相互乗り入れがいちばん早く実現すべきポイントではないかと思えますが。

木枝 いましてませんか。

岡野 やっていたらいいと思います。私のほうの図書館も同大の先生方や大学院の

方が利用しておられます。

北垣 まだアンダーグラデュエイトまでは及んでおりませんね。

木枝 いや及んでおるはずですよ。

岡野 アンダーグラデュエイトは私のほうは同大のを見せていただいていると思います。ただ同大のアンダーグラデュエイトの方が女子大のほうに来ておられるかどうか。大学院の方は来ておられますけれども。

木枝 学部生は行っていいでしょう。

岡野 これはぜひお願いしたいと思えます。

北垣 そしてよほど珍しい資料は、両大学の図書館が相談して、これは大学に置く、これは女子大に置くという協定を結べるようになると思います。

岡野 それはやっています。とくに英米文学関係はやっております。

田辺での宗教教育

北垣 田辺での宗教教育の展望、あるいは同志社の建学の理念をいかに生かすかといった問題に入らせて頂きますが、大学のほうではチャペルの建設をめぐって、いろいろ議論

がなされてまいりました。やはり新島襄の同志社でございますので、一年生、二年生のフレッシュなときの宗教教育は非常にいいじだと思わうのですが、こんどは女子大のほうから、岡野先生、この点に関してどんなふうにいま計画が進んでおりますか。たとえば短期大学のための宗教教育に関しては、何か特別なご計画がありますか。

岡野 特別なということじゃございませんけれども、宗教教育は、とくにこんど新しく発足する短期大学の場合には最初から相当強くやっつけていこうと思っております、入学式後に全員を、びわ湖のほとりに何とかいう大きなホテルができてまして、そこへ泊まりがけで連れていきまして、最初から同志社の立学の精神をたたき込んでいこうというようなことも計画しています。やはりキリスト教教育は、新島先生が言っておられるように血となり肉となるというような形でやっつけていかなければいけませんので、毎日の礼拝を守るとか、修養会をやっつけていくとか、そういうことで何とか学生に同志社精神を知ってほしいと思っております。

北垣 短期大学のチャペルアワーのよう

な計画はいかがですか。

岡野 短期大学部も毎日こちらでやっているような形で、同じ時間に礼拝を守っていくということに、こんど決めました。だから十時四十分から十一時まで、月から土まで毎日、これは伝統としてやっつけていこうと思っております。

北垣 いま女子大学のチャペルの出席率はいかがでございますか。

岡野 最近だいぶ増えてきました。宗教部が熱心にやっつけていますので、秋の修養会に百五十名ぐらいの学生が参加しております。

北垣 多いですね。

岡野 いままでには百名ぐらいだったんですが、そういう意味の金は出すからやりなさいと言っているんです。ところが泊まる施設という点ではなかなかむづかしいので、百五十名ぐらいが限度じゃないかと聞いています。先ほど言った短大の場合は全員となると、教職員を含めて六百ぐらいになるのですが、それぐらいが一度に泊まれて、分散して会合をもてるような施設が最近ではできてきていますから。

北垣 大学のチャペルをつくるという計画もございしますが、まだ具体案が正式に認められるところまでできておりませんですね。このへんの点に関して木枝先生、見直しをお話しただけじゃないでしょうか。

木枝 チャペルの問題は新聞にも書かれておりまして、もちろん宗教センターがちょっと遅れて着工しておりますが、その近くに大学独自の質素なチャペルを建てるということには非常に望ましいことだと思います。これは一九八四年三月十五日の大学評議会で、中身は、つまり坪数がいくらといったようなことは明示しておりませんが、チャペルと宗教センターを対にして入れておるわけでございます。それをどう実現していくかという問題ですが、その段階で、さしあたっては田辺三校共通のチャペルを募金でもって、十一億ほどの規模でしかるべき場所に建てるという上野前総長のお考えに従って、これを利用していただけないかというふうな気持ちもあつたわけですが、共通施設のチャペルもまだ構想でありまして、具体的にどこへどうということは最終的には結着をみていない問題かもしれません。しかし十一億のうち、すでに

六億ぐらいはできておると思います。一一一周年記念事業は順位をつけてやっておりまして、記念講堂という名前ですけれども、これもまだ具体化というところですっきりしておりません。女子大校地内につくったかどうかというように話が進んできておったわけですが、ぜひこれも実現したい。

大学独自のチャペルというのは、たとえば上空から田辺のキャンパスを見たときに、宗教学センターの近くに手ごろなものがあるというのは非常にふさわしいですね。何とかこれを時間をかけてでも実現していきたいと思っておりますが、さしあたってお金の面で、それではすぐ実施案をつくりましょうというところまでは熟しきっておりません。残念でございますけれども。

これは建学の理念に結びついてくることですけれども、同志社英学校ができましたときには、あれは一つの大きな新しい仕事でしたね。それから第二次世界大戦の数年前ぐらいから同志社は非常に苦しい目をしてきて、敗戦ということは不幸であったのか幸いであったのか、そのあと、新制大学として同志社は

いわば第二段階に入ったと思うのです。復活と言っているのか再生と言っているのか、そしてこんど田辺を利用することによって、三番目の大きな転機といえますか、これを契機にして、建学の精神のリバイバルを行っていただきたい。ところで「リバイバル」ということの中には、もう一つ好ましくない偏った意味があるのですか。

北垣 聖霊中心の熱狂的な信仰覚醒運動をリバイバルといいます。したがって、そういうものはすべての人々が必ずしも望ましいとは思わないわけです。明治十八年ごろにこのキャンパスでリバイバルが起こりました際に、一、二名発狂した学生が出ました。あまり行きすぎたために。

木枝 私はそうではない新島精神を基盤に据えたりリバイバルが起こらないかと願うものです。偏りすぎるといけないと思うのです。クレジーな領域へ入ってしまうといけない。そうではない同志社らしいリバイバルですね。これにはやはり何人かのリーダーが必要だと思いますね。これは私、大学組合との話し合いで言ったことがあるのです。このままだと一、二年が移るといっては、不自由

な面ばかりが目につきすぎる。私が先ほど新しい価値の創造をやっていたく空間と言ったなかの最大のものは、第三の出発といえますか、それを契機として、いい意味でのリバイバルが澎湃と湧き起こってくれないか。これは二万の学生全部でなくてもいいと思います。学生諸君のしかるべき人たちが同志社らしいリバイバルを、どういう形であるのがいかがは別ですが、声をあげてほしいと思いますね。それはよくは、チャペルの問題よりもより重要ではなからうかと個人的には考えております。

北垣 チャペルの問題は非常に重要だと私も思っておりますが、大学ではチャペルの問題ばかり論じて、チャペルアワーを決定するのにはだいぶ時間がかかったようなこともございましてね。結局戦後新制大学になったときから守っております水曜日二校時目というところに落ちついたわけですが、せっかく決めた以上はその時間をぜひ守れるように、総力を挙げていってほしいと私も望んでいます。

チャペルを建てることに關して私、二つの意見を聞くわけでして、一つは百八十億ある

いは二百三十八億のうちの二億なんだから、チャペルを無視した形になっているのはけしからという意味です。つまり、同志社が田辺に行くのだったら何をいっても建てるべきだということ。もう一つの意見は、チャペルはだいいじだけれども、そんなに急がなくてよろしい。ほんとうにこれこそ、われわれのキャンパスにふさわしいチャペルだというアイデア、ビジョンができるまでは待っていてもいいんだと。現にいま中学チャペルと言ってますD・C・グリーン宣教師の設計しました重要文化財のチャペルは、このキャンパスが使われはじめてから十年以上たつてからできています。

**木枝** たしか十一年目じゃないかと思いません。

**北垣** それからオックスフォード、ケンブリッジ、あるいはヨーロッパ、アメリカのいろんな大学のキャンパスにあるチャペルを見ましても、チャペルからスタートした例はあるかもしれませんが、案外そのキャンパスにふさわしいものを、だんだんくふうして建てております。アモストの例を見ますと、いちばん最初にできたのはサウス・カレッジで

ありまして、それからノース、真ん中にチャペルということ、だんだんとつり合いをとっていきますね。オックスフォードなんかでも、はじめからああいいう荘麗なものを建てたのでしょうか。先ず何を措いてもチャペルをという考え方もよくわかりますが、時間をかけてということもまた一つの考え方だとも言えるように思うのです。

したがって、共通施設のチャペルは今後ほんとにいいアイデアをできるだけ絞って考えて、あのキャンパス全体のいちばん重要なものになることを、私は願っております。

**木枝** 二百三十八億の中の二、三億だというのならば、三百億の中の十一億でございまして、これはやはりいいものをつくってほしいと思います。

**岡野** 木枝先生とはちょっと私は違うのですが、これは同大の学内事情があるでしょうから、そのことは別にしまして、女子大の場合は独自のチャペルをつくる計画を最初持ってたんです。ところが共通施設のチャペルというものが出てきました、そちらに乗り換えていくということでいまやっております。同大はもちろんチャペルアワーを持っておら

れるわけですが、国際高校と女子大の場合は毎日礼拝を守ってまいりますので、共通施設のチャペルは六十三年四月までには建てていただきたいのです。礼拝の場所がなくて、国際高校もいまちょっと困ってますからね。千名収容となれば国際高校のほうも一度にできるでしょうし、私のほうも一度に毎朝守っていけるということです、これは松山総長にもお願いしているのですけれども。

**北垣** もし期限を切るのだったら、六十三年の三月までにはできてないといけませんね。

#### 女子大の存在理由

ではこのへんで、新しいキャンパスを得られまして、女子大学のあり方に対する一つの反省のようなものをお聞きしたいわけでございます。ここまで男女共学が発展した現在、なお女子教育の意義をどういうふうにお考えになっているかという問題です。私もたぶんと思っています。しかし岡野先生に少し本音も出していただきまして、どんなふうにお考えになっているかを伺えたら幸いです。

岡野 昭和三十八年ぐらいいましたが、早稲田の陣峻という先生が『女子大生亡国論』というのを出版されて一時話題になったことがありました。私はいろいろな形態の学校があつていいんじゃないかと思つてゐるのです。共学もいいですし、あるいは男だけの学校もあつていいし、女子だけの学校もあつていい。

ただ最近、女子大学で少し変わつてきつたものは、いままでは女子大学といひますと純粋培養のようなものが社会からも期待され、またそれが一つの特色だつたわけですが、だんだんその影が薄れてきておりますね。そういう意味では共学大学とそんなに変わらぬい考え方を学生自身も持つてきてゐるというようなのが考えられますけどね。

だから私は、女子教育、男子教育あるいは共学それぞれ特色があるんだから、多様な教育制度という面からいけば女子教育というものも今後も続けていつたらいいんじゃないかと思ひますね。

北垣 ただ先生がいまおっしゃいました男子オンリーというのは中学・高校まででして、大学として男子オンリーというのは、も

うそろそろないんじゃないか。つまり高等教育における女子教育の意義といつた点はいかがでございますか。

岡野 男子だけがあるでしょう。商船大学なんか男子だけですから。

木枝 いやもう入つてますよ。

岡野 女子が入つてますか(笑)。

木枝 たぶん入つてゐると思ひます。もうほんとになんないんじゃないでしょうか。

岡野 防衛大学校ぐらいでしょう。

木枝 しかし米国では軍の学校に入つてますね。士官学校なんか入つてゐると思ひます。

岡野 アメリカの例を考へてみしても、一九六〇年代には女子だけのカレッジが相当吸収合併されたり廃校になつたりというのがありましたけれど、七〇年代に入つて最近ではそれがまた盛り返してきてゐるようですね。ただそれが、どういふことが原因になつてゐるのか詳しいことはわかりませんけれども。

木枝 近所の共学の大学へ単位を取りに行けるのじゃないでしょうか。

岡野 ラドクリフなんかはそうですね。

北垣 ラドクリフはもう名前だけで、ハーバードの一部です。

岡野 もう寮だけですか。

北垣 寮の中にも男が入つてゐます。ですからアドミニストレーションとしてのラドクリフ・カレッジはありますけど、それだけで、名前だけです。卒業式もいっしょにやります。

木枝 同志社女子大学というものが独立にあるんじゃないに、大学といつしよにあるところを意識があるんじゃないかなるかと思ひます。我田引水みたいですけどね。ですから同志社では、同志社女子大学は新島先生の女子教育の理念に立つてちゃんと続いていけると思ひます。これがたとえば山科に同志社女子大学があるというのとだいぶ違ふと思ひますね。幸いこんど田辺でもいっしょですから、ますます田辺では垣根は低くなると思ひますか、アドミニストレーションが別といへば別かもしれませぬけど、同志社として同志社女子大学というものは、ますますいい方向へさらに伸ばしていけると私は思ふのです。

北垣 いまおっしゃつたことも非常にだい

じだと思っっています。別々のファカルティがあることは違うわけですが、そして多少規模も違うだろうと思っっていますね。学費も違うだろうと思っっています。しかし学生諸君は案外そういっただことにはとらわれないで、課外活動を見ておりますと、女子大学の学生さんがこちらのほうに入っておりますね。それに対して

どういうポリシーをお持ちかは知りませんが、スポーツのほうでマネージャーをやっている人もあります。私はたまたま聖書の勉強会を水曜日の朝やっておりますが、女子大からも一人学生さんが見えています。ずいぶん熱心です。やはり木枝先生がおっしゃるように近くに存在しているということは、学生諸君にとってはより多くの機会を提供されているということだろうと思っっていますね。

**木枝** 先生がそういうことをやっていただいているのは、ものすごくいいことだと思っますね。実はあるとき、私の実験室に見慣れぬ女の子が座ってタイプ打ってらんですわ。それで学生を呼んで「あれはだれや」というたから「女子大の子です」。卒論を英語で出したわけで、それを打たしているんですというので、怒っていいのか悪いのか(笑) ちよっと

困りましたけれども、私は「それは結構だ」と。タイプぐらい自分で打てよと言いたかったんですけど。ですから大学のほうは、ほんとに女きょうだいのようなつもりで学生もいってくれると思っっています。

**岡野** 女子大のほうは同大のほうからいろんな面で援助も受けていますし、協力もしていただいで現在のような形態になってきているんですけども、そういうメリットもあるんです。ところがデメリットもある(笑)。いちばん苦労しましたのは、二十四年に四年制の大学になったときのことです。全国的な観点からいきますと、女子大学というのは短期大学のように思っっているんですね。同志社大学のひとつだ、と。

**木枝** なるほど。そうですね。

**岡野** だから同志社女子大学は独立した学校なんですよということ世間に知ってもらうのに非常に苦労しました。最近はなんとかわかってもらえていると思っんですけどね。だからそういう意味では女子大学は女子大学としての、また同志社大学と違う面をもたなきゃいけない、そういう苦労はありますね。

**北垣** まだ先生のおっしゃってないいろいろ

など迷惑なことがあると思っますが。

**岡野** いや、べつに迷惑といっただものじゃありませんよ。

**北垣** たえばこちらのキャンパスがワイワイ騒いでいるときに逃げて行きますからね。(笑)

**岡野** そんなものはべつに問題じゃないです。それは遠慮していただくことは要らんわけですけどね。まあメリットのほうが大きいんじゃないですか。

**北垣** その言葉は大学の一員としてはたいへんうれしいことです。

**岡野** こちらのほうがいっろお世話になつていられるわけです。

**北垣** もう一つ、同志社女子大学の大学院として将来こういっただ方向に特色を伸ばしていきたいというような計画、重点の置き方はございませうか。

**岡野** いま考えていますのは、英文学科はマスターとドクターをもっていますけれども、家政学研究科のほうは食物学だけの専攻で、これはまだマスターだけです。これはやはりドクターをもちたい。それから家政学科と音楽学科は大学院をもっていますので、

一応みなそれぞれに形を整えていくことがまず第一だと思って、来年ぐらいいから取り組んでいこうと思っています。

北垣 音楽の大学院というのは、私立大学ではたくさんあるわけですか。

岡野 たくさんということはありませんけれども、相当の大学がもっていますね。

北垣 博士号を出すところもございますか。

岡野 いや、まだ音楽学科のドクターというのは、私は寡聞にして聞いてないですけれど。

北垣 アメリカでは、たとえばエルル大学でドクター・オブ・ミュージックを出しておりますね。あるいはドクター・オブ・フィロソフィというのかもしれないけれども。

#### 輝かしい可能性

北垣 お話が進んでいくわけでございますが、いまの木枝先生のお言葉をかりますと、田辺という第三の新しい出発を来年の四月に控えているわけですが、この田辺計画、田辺の土地の取得というところから教えますと二十年もたち、そしてその間学生運動

が非常に高まったりいたしまして、一時期、大学長ですら田辺問題には触れたくないといったところがございます、かなり停滞したわけですね。そのことが同志社大学にどういう影響を与えたかといえますと、いつの間にか気がついてみると何もできない。大学基準によつてがなじがらめに縛られていて何もできないというあきらめムードのようなものが大学を支配してしまつたんじゃないか。したがって、こんどその枠が一挙に取りはずされますと、一種の目まいを感じてしまつて、何をしたいかわからない。つまり待ちに待った解放の日といった喜びを感じることができないほどに、私たちはちょっとどうしようもないという気持ちに陥つてきたんじゃないかという気がいたします。

大学ではいわゆる中長期の計画を考える委員会もございまして、そのうちに答申が出るとは伺っておりますけれども、きょうは木枝先生、もう少しその辺のことを、中長期の答申とは関係なしに、先生のさきほどのお言葉では、新しい価値をつくりだしてもらつたため、新しい空間が確保されたという立場から、二十一世紀に向けてどういう開かれた可能性

があるのか、それはたとえば学部の新しいあり方、新しい学部、そういった点を含めて何か先生のお考えをお聞かせいただけませんか。ようか。

木枝 まず最初に設置基準で縛られている、これについては日本の大学、国公私四年制の大学は全部痛みを感じております。ところが大学社会の閉鎖性のために大学自体で活発に議論していくことが今までできなかった。外部からは臨教審もお考えだと思いが、しかしやっぱり主として大学の教員が自分の大学のことをもっと真剣に考えていただくことが先決だと思つてですね。

きのう大学基準協会の理事会でちょっと雑談のような形でざつとくばらんに国公私立の先生、学長さんあたりがおっしゃったことも、まず第一に教員に自分の大学というものをと真剣に考えてもらうこと、某国立大学の学長の言ですが、教員があまりにも自分の研究のことしか考えない、それも業績を上げるという観点からだけしか考えない、つまりペーパーの数だけしか考えない、これではほんとうのクリエーティブな研究もできないのではないか、この調子では国立大学は必ず国鉄

の二の舞いになりますよと(笑)、はつきりおっしゃった。そうすると某私学の学長さんが、国立大だけではない、なるほど私学のほうがまだ国立よりは自分の大学のことを余計に考えるでしょう、しかし似たような状況ですということをおっしゃいました。

ですから、新しい学部いま中長期検討委員会でそれはご検討になっているでしょうが、同志社大学としては、やはり学部がそれを叩き台にしていろいろ積極的に考えてもらう。それは自分の学部の立場を一段超えて大学として考えてもらう。同志社大学の教員という立場で考えていただきたい。これをほんとうに念願いたしますね。その結果出てきたものは、これは同志社大学全体が推進するにきまつております。ですから、学部の問題もありますし、大学院の問題もありますが、新しい学部の可能性、これは私はどうしても新しいいいものを同志社大学でつくりだしてほしい、少なくとも二学部くらいはつくりだしてほしいと念願しております。これは上から与えられたものでなしに、全教員が同志社大学の教員の立場で考えてほしい、こう思っております。

北垣 なかでも一、二年の授業を田辺でやるということでございますので、いわゆる一般教育科目、外国語、体育等の先生方を中心とした総合科学部の案がかって出て、それが日の目を見ないまままで推移してまいりました、この辺のことに關してと、もう一つは、この一年間、木枝先生が学長案としてお出しになったものに対しても、寄ってたかって足をひっぱって骨抜きにしてみましたという経緯がございますが、この辺のことに關してはいかがでしょう。私はたいへん残念なことであったと思っておりますが。

木枝 総合科学部につきましてはいろいろいきさつがございまして日の目を見なかった。一つは、多数の教員を新しく外から任用しなければ成立しないという、率直に言ってそれが一つございました。その結果一般教育専門委員会の継続がストップしたような形になりました。一つは大学全体の立場としてお考えいただいていたのではありませんかという感じがいたします。これは私の個人的な見解かもしれませんが、つまり表へ出しても大学全体で推進していただけないと判断したわけです。ですからこれは別の生かし方

をしなければならぬ。ですから総合科学部案は同志社では時機を失したのではないかと。しかもよその大学の総合科学部に相当するような学部はもうひとつ人気がありませんね。人気だけじゃなしに所期の成果をあげていないんじゃないかと思えます。ですから別の新しい学部を考えたほうが私はいいいと思えます。

北垣 その場合、教養部という考え方はあまり魅力のないものなのでしょうか。

木枝 それは言葉が悪いかもしれませんが、当事者が拒否された。

北垣 たぶん魅力がないからでしょうね。

木枝 ないんです。

北垣 そういたしますと、持っていくようがない感じがこの問題に關してはしてまいりまして(笑)。何かいちばん実現可能なんでしょうか。

木枝 これにつきましては、新制大学の一つの大きな理念でありました一般教育、その考え方を反省しなければいけない。私の接します多くの国公私立各大学長も、一つの転換期にきているという痛切な自覚をおもちです。同志社が所属しております私大連盟は、

臨教審第四部会に高等教育改革の方向として提言しております。意見聴取に応じておりますが、そのなかで一般教育、つまり人文・社会・自然のあり方、これを考え直せという意見を述べております。その三つを全部やらなきゃいけないのか、たとえば一、二年に歴史を主眼としてやって、そのうえ三、四年で日本史をやるといった行き方のほうがいいのではないか、そういう考えを私大連盟の考えとして述べております。おそらく臨教審第四部会の次の大きなテーマとしてこれは一般教育に関して出てくると思います。そのなかで語学、体育、それから同志社でいえば一般教育、自然系の専任の方たちのあり方、それを模索していくべきだと思いますね。

北垣 ただ今の先生のお話はたいへんおもしろかったです。たとえば田辺に語学力を養成するようなセンター、これはL1をフルに活用して、今のようにただ単に教養英語だけということでなしに、もっと耳からも口からも自由に外国語をあやつれるような学生を養成するセンター、それをもつことのほうが何らかの学部名をかぶせたものを模索するより先だという感じがしてまいりますね。

かつて森浩一教授が主張しておられたんですが、やっぱり基礎学問をする場所としての田辺という考え方をすべきじゃないだろうか。もし基礎学問ということになるのだったら、私は同志社の特色を生かして、英語がもっともって学生たちにほんとうに実力がつくということをめざす必要があります。しかしか、ということをお考えのこと、それからこれを基礎にしたらうえで、どの国でもいいんですが、それはヨーロッパの文化であれ、東南アジアの文化であれ、よその国の文化に対してアレルギーなしにそれを自分で勉強していく力をもった学生、そういった面と、それから何らかの意味で歴史的な感覚を養えるような科目、もう一つは宗教的な感受性と申しましょうか、そういったものが養われるような訓練、それプラスこれからコンピューターの社会ですから、コンピューターというものにアレルギーなしにどの学生でも接しられる基礎的な面が養成できるように、そういった五つぐらいの部門を置いて、同志社の学生はそれを全部くぐらなきゃならない。もしそういうことが将来の田辺に制度として、教室としてできるならば、それはまだほかの大学でや

ろうとしてなかなかやれない新しいことじゃないかと私は思ったりするんですが、いかがでしょうか。

木枝 岡野先生は英語のほうですし、どうぞ。(笑)

北垣 女子大学のL1はどうなっていますか。

岡野 女子大学は田辺にいいのができますよ。

木枝 語学についていいますと、私なんかは専門領域で英語とドイツ語の論文を読めればいいという教育を受けてきたわけです。今やそんなことでは全然だめですね。やっぱり自分の思っていることを外国語でかなり自由に表現できないと、つまり学ぶのではないわけですね。外国語を通じて対等に話をする、それができなくちゃいけないと思います。ですから、まずやっぱり国際語として英語ですね。それからコンピューターというよりは論理学ですね、近代的な論理学。それから私の領域から見ると、これからは将来という領域で働くにしろ同志社の学生はくぐってほしいと思いますね。不思議なことに数学のでき

る人はわりあい語学ができるといわれておるんです。この逆が真でなくちゃいけないというので、そういう関門をくぐって、同志社は新島先生の時代から国際交流の学校ですから、やはり国際的な活躍の舞台をもつような学部というのはどうしてもほしいですね。その基本はやっぱり英語ですね。工学部の学生を見ていると、あまりに英語ができないので、あの難しい入学試験をよう通ってきたなと思うんですね。

**岡野** いまの語学教育とかコンピュータの教育とか、そういうことはこれからは必ず必要になってくると思いますけれども、ただ、それをカリキュラムの中でどう組み入れていくか、これが問題だと思いますね。それでこんどつくります短期大学の場合にはそういったものをやろうと思ひまして、それをやっていたためには教員免許状をやらないことにしました。だから短期大学は教職課程なしです。そのかわり実学をやっていく。何かそういうポイントを決めてやっていきませんか、卒業単位の中でそれをこなしていこうとしますと、口で言うのは簡単なんですけれども、実際に各学部にもって行ってそれをどう組ん

でいくかということになりますと、なかなか難しい問題があると思いますね。しかしそれを何らかの形でやらなきゃいかんでしょうね。

それから新しい学部ということですから、同大の場合ほどの規模じゃないですけれども、女子大の場合は、さっき申しましたように日本文化学科というのを六十三年から発足させる。これは私のほうでは教授会でつくるということだけは決めたのです。そのカリキュラムの内容は委員会から答申が出て、教授会でそれを検討しているところなんです。この日本文化学科というのは、さっき出ました国際交流とかそういうものが今後どんどん激しくなってくる。そういうなかで女子大の場合にはその留学生の受け皿が何ぶん学科が少ないものではないわけです。そうすると日本文化学科でもあれば、京都の歴史とか、京都のいろんな文化的なものを学ぶにしても、そういうものが一つの受け皿として役に立つんじゃないかというようなことも考えました。このあいだ聞いたところでは、昭和六十七年に十八歳人口が二〇五万ですが、七十五年には一五〇万になる。五〇万へって

くる。文部省はその対策として一つは一〇万人の留学生を受け入れる。これは東南アジアも含めてです。そのうちの六万五千を私学のほうでやっってもらおうという計画をしているようです。いろんなことで国際交流というのは避けて通ることができない。むしろその対策を考えていかなければいけないという時期です。女子大のほうもそういう新しい学科をつくって対処していこうと思っているんです。

**木枝** 中国の諸大学からお客さんがみえて、それで話を聞いていますと、中国では大で栄養学なんていうのはまだないんだそうですね。ですから、それじゃうちの女子大へ留学生を出して——女子大のことを言うて申しわけないんですけれども、女子大への留学生も増えてくると思ひますよ。ただ、私学が六万五千も引き受けられませんか。とてもできない。そのことは私大連盟でも申しております。それはむちゃですよ。金をうんとくれますかということをやっているわけです。

もう一つ、留学生としてやはりドクターの学位がほしいんですね。文部省そのものは、新制のドクターというのは研究者としてスタ

トしたということなんだ、もう少し各大学はその観点に立ってドクター・コースの学生を指導してほしいと、こうおっしゃっておるんですがね。いちばん簡単に出すのは東大なんです。その次が京大なんです。私の甥は東大で伴は京大なんですが、伴の学位論文は手書きですよ。甥のはM論、D論という言い方です。D論出しますと、出すなりシカゴへ研究生で行っているわけです。安易に過ぎるといえば安易に過ぎるかもしれませんけれど、留学生に対してだけ博士学位を安易に出すわけにもいきませんね。ですから、同志社の学位はほんとうに難しいと思います。研究者としてかなり円熟しておらんともらえない(笑)。そういう考えをちよっと排して、たとえばPh・Dにしてしまおう。Ph・Dという言い方でよろしい。それと共に、区別すると悪いけれども、Ph・Dでない人はドクター・オブ・エンジニアリング、ドクター・オブ・何々という形で出したらどうかというようなことをかねがね思っているんです。だからそこからも変わっていかなくちゃいけないと思いますね。

北垣 しばしば承るご意見ですが、現実には

なかなか博士学位はもったいぶって出て出さない。(笑)

木枝 岡野先生のところも栄養学博士ぐらいどんどん出されたらどうですか。(笑)

北垣 そういうことになれば、国際交流を進めるための一つのいいな突破口にはなるでしょうね。

木枝 ドクター・オブ・エンジニアリングというのと、Ph・Dより下と見られるわけですね、ある場合には。

北垣 体育学部といったようなものは、できるとすればわりあい早くできる分野ではないでしょうか。どういうふうにお考えになりますか。

木枝 体育学部という学部にするか、その前に学科としてスタートするか、私は現実からみて学科として社会健康学科とか、これは思いつきみたいな名前ですが、しかるべく考えてもらったらどうかと思いますね。

北垣 その場合、学部はどういう名前になるんですか。

木枝 それはたとえば文学部の改編にに応じて何か出てくるかもしれません。その中へお入りになってもいい。私はそれがいいと思う

んですけれども。

北垣 文学部ではいちばん早いところではたぶん社会学部といった構想が出ると思いますが、そうしたチャンスに社会健康学科などが加わるということですね。

木枝 そのアイデアは上野先生がおもちで、それを私は受け売りしておるだけですが、いいと思いますよ。

北垣 上野先生は今の工学部を理工学部にしたらどうかということを主張していらっしやったのを思い出しますが、あれはどうして理工学部がいいとおっしゃったのか、その理由がちよっとわからなかったのですが。

木枝 それはやはり新島先生が理学士でしょう。もし新島先生がもつとご長命であれば、必ず理学部に医学部ができていたと思えますね。そこらの歴史的背景からではないかと思うんですが、関係の深い工学部のほうは前に理工学部案に対して一度検討をいたしました。それに対して時間尚早である。これは卒業生が売れないという点がまず第一、それから設備がまた大変であるということで時期尚早となったわけです。しかし、設備がなくともできるものがあるんじゃないかと私は思

うんですけどね。慶応が理工学部にしましたね。

**北垣** 京都大学を見ますと、工学部はほんとかい学部で、教授だけで一四〇人いらっしゃるって聞きますが、現在の同志社の工学部は伝統的に電気、機械、化学、それぞれが二つの学科になって六学科編制だと伺いますが、先生は工学部に所属しておられて、新しいチャンスをつかんでもっともっと拡大していくのがよいとお考えになりますか。どんなふうにお考えになりますか。

**木枝** 私自身は一つの学部があまり大きくなりすぎたらいけないと思うんです。今まで大学というのは、学部自治、教授会自治の上に大学の自治を置いてきたわけです。学部の垣根というのは少し低くしていくべきではないか。そういう中で理科系のものを考えるか。そういうのではないかと思っております。しかし具体的にどうこうということとは、私自身の中でまだ熟しておりませんけれども、根本は大学の自治というものはだじじである。そのためには学部の悪い閉鎖性は打破しなければならぬと、こう考えております。

**北垣** アメリカの大学を見てみますと、

ハーバードにしても、小さいアーモストにしても、学科が単位で、学部ではございませんね。あれはいま先生がおっしゃっております意味での垣根を低くしているように思えます。たかさんの小さな学科がスペクトル風になぶというやり方をとっているように思います。そして学際的に小さなプログラムを組んで、それが何かいい手柄をたればまた学科にするとか、そういったことが非常に盛んで、たえず前進している印象をうけますね。

**木枝** たえず変わる可能性を含むということとはだじじだと思いますね。

**北垣** その意味で先生がおっしゃいましたように学部の壁というものはどの大学でも厚すぎて、ほんとうに自縄自縛の状況に陥っている感じですね。

**木枝** そうですね。閉鎖してしまいうわけですね。

**北垣** 田辺ではゼミ中心のカリキュラムにして、小教室だけを使い、大講義はしないでほしいということを大胆に発言する先生もおられたんですが、私もその発言を伺いながら、たとえば私は文学部で英文学史という科目を担当しております、今四百何人登録者

がおりまして、マイクでやっておりますが、ああいった科目なんかは、なんだったら一回模範的なのをテレビに撮っておいて、くり返し聴いていただいで、試験はなしにして、というふうにしてもいいんじゃないか。むしろ十五人、二十人のセミナーで学生を鍛えていくことに教員はエネルギーをつかって、講義のうちの基礎的なおもなものは全部テレビ化できはしないだろうか、ビデオテープに撮っていくということはどんなものだろうかという気がしますが、やはり教員の中には今でも、いや、大学はテレビと違うんだという気持ちが強いように思いますね。そんなことはお考えになっていませんか、女子大学では。

**岡野** うちはそのうことは考えておりません。

**北垣** やはり人間でないだめですか。

**岡野** そんなに大きなクラスはないわけですね。小クラスをたてまえてやっておりますから、それこそさっき言った何か同大よりは違った面での特徴を出しませんといけませんから、こんどの短大もみな二十名くらいとか、そういうクラス編制で基礎的な学科をやっていくということにしておりますけど。

木枝 私も田辺は小クラスでやっていくという考えに基づいておったわけですが、学部  
の性格によって千人なら千人を前にして、い  
わば非常に権威のあるお話をするということが  
必要な講義ですね、そういうものがある。  
同じことをやるんですが、そういうふうなこ  
とをやり、一方では小教室、これを主張され  
る方もございまして、いろいろ他大学の様子  
を聞いてみると、やはりそういうものが伝統  
的に必要であるということがわかってまいり  
まして、千人以上の教室も準備させていただ  
いたんです。

北垣 文学部でその報告がなされました  
きに出来ました声は、それは理解できない、ど  
うしてそうなるのか、ということを発言した  
人が一、二名ありました。

木枝 私もわからなかったんですが、詳し  
く話を聞いてみると、なるほどなとわかりま  
した。それはもちろんそれだけで全部やられ  
るわけじゃないんです。細かいのもちゃんと  
準備しておられて、しかもやられる。

思い出しますのは湯川秀樹先生の量子力  
学、これは話に聞いておるんですが、これも  
年に数回、そういう想を練ったあけくのお話

をされる。だれが聴きに行ってもいいわけ  
です。物理の学生、化学の学生、みな行くよ  
うですが、それで細かいところは湯川先生の  
『量子力学序説』ですか、それを読んでいけ  
ばいいんだと、そういう話を聞きました。そ  
れに対して工学部で、うちは京大の理学部と  
違いますよという反論もありました。それは  
ありましたが……。

北垣 イギリスの大学に学んでみますと、  
イギリスの大学の講義に対する考え方は日  
本、アメリカと違います、講義というの  
は、学生がその学科のわからないところを理  
解する助けにすぎないのであるから、講義は  
しっぱなしなんです。だからだれが行って  
いつ聴いてもいい。あるいは行かなくてもい  
い。試験もない。しかしテューリアルで一  
対一のインタヴューをやりながら、講義はそ  
ういうふうな補助手段としてなされていると  
いう、そういうところを見ました。それから  
これは英文学のことですけれども、シェーク  
スピアとかミルトンとか、ああいったどうし  
てもみんな勉強しなければならぬ作家に関  
しては、たとえ講義がなくても学生は各自勉  
強して行って、そして試験は受けなくてはな

らない、そういう制度をとっておりました。

この点、日本の大学はどの科目も試験は必  
ずある。したがって、私がつくりするの  
は、千人も登録する科目でどうやって試験の  
採点が教育的にできるのだろうかという、そ  
このところです。ですから、千人の講義があ  
ってよろしいと思えますが、それはやっぱり  
だいいいな講義で、しっぱなしでもいいとい  
うことです。おっしゃいますように小クラスで  
の手当があつてこそ生きてくる。そのとおり  
だと私は思います。

木枝 私はそれを聞いてよくわかったわけ  
なんです。大学の一つの顔として大教室棟は  
ぜひ欲しいと思つています。

北垣 今まで両先生からほんとうに詳しく  
率直にいろいろな点で発言いただきまして、  
興味深い鼎談にさせていただいたと思つてお  
ります。最後に、二十一世紀の田辺に託する  
夢といった点からご発言いただけませんでし  
ょうか。岡野先生のほうからお願いたしま  
す。

田辺に託す夢

岡野 田辺の新キャンパスが始まるという

ことは、大きく考えたら同志社の新しい歴史が始まるということになるんじゃないかと思えますね。いちばん考えなければいけないのは、キャンパスが二つになる、そのために起こってくるデメリットですね。これは非常に大きいと思うんです。ですからそのデメリットを克服して、そしてさらに田辺キャンパスというものを開校して同志社としてどれだけの意義あるものができてるか、これがいじだと思えます。だからそのための努力をこれからわれわれはやっていかなければいかんと思っています。

考えてみますと、田辺キャンパス構想というのは、さきほども出ていました大学設置基準の中で校地が足りないということが致命的になってきたために、同志社大学も女子大学も田辺校地の利用を考えなければいかんということだったわけですが、校地問題がこれで解消されるわけですから、これからはやはり教育内容、とくに二十一世紀に向けて生き残れるような教育内容をどんどん進めていかなければならんということです。そういう意味では田辺というのは同志社の大きな夢であり、また希望であるという気がします。

北垣 ありがとうございます。木枝先生  
お願いいたします。

木枝 夢といいますと私はすぐ悪夢を連想してしまふんですけれども（笑）、悪夢であってはならないと思えます。やはり教職員が自分たちの田辺であるという認識を強めていただいで、しっかりした姿勢で学生諸君に接していただく。新島先生が日本に一つの私立大学をといわれた中身、それはキリスト教主義に基づいて国際的水準の学問レベルを維持するような大学というものを考えであつたと思うんです。ですから大学である以上、学問的水準はやはり高度なものをめざさなければならぬ。それはまなぶ姿勢ではなしに自分でつくりだす姿勢ですね。

それで思い出すのは、鎖国が始まりましてしばらくは外国の文献が入ってきておつたんですが、洋書禁止というのをやりましたね。洋書禁止をやつてしばらくしてから日本独自の、たとえば和算を見ますと非常な発展をしているんです。それが解禁になって、せっかくのつくり上げたものが崩れていったところがありますが、今やわれわれはいわば洋書が禁止されたと等しい状態にあるという認

識をもたなければいけないと思えますね。

ですから、こんどはわれわれが考え、みつけだし、つくりだして変えていく。それにとつていちばん大切なのは、大学の先生方がまず頑張つていただく。頑張るといふ言葉は悪いですが、時には自分の専門を全く離れて同志社の将来というものを真剣にお考えいただく必要があるのではなからうか。そのことはご自分の専門にとつても有益な結果をもたらすと私は思うんですけれども、各大学とも同じことを言っておるようです。先生方それぞれ重いロードを抱えてやっていたらいておるんですが、第三の出発という点を契機にしてもうひとつ高い次元で教育と研究を考えていただきたいと思っております。

北垣 きょうは超ご多忙でいらっしゃいます両大学長にこれだけ時間をかけてお話をいただきましてほんとうにありがとうございます。この辺で鼎談を終らせていただきます。

（一九八五年十二月一八日収録、於有終館担当  
理事室）

# 現代文化への批判と同志社の将来

藤代泰三

この四月から同志社の田辺校地が開校される。これは、同志社創立以来の大きな出来事のひとつといえるであろう。このような時、私たち同志社人は、同志社教育の独自性について十分に考えなければならぬと思う。

## 精神性の豊かさを

こん日、私たちを取り巻く自然科学の発達が目ざましく、私たちの生活は、多くの面で豊かにされてきている。しかしこのような時、私が強調したいことは、私たちは精神性の豊かさを取りもどさなければならぬということである。今日は、世をあげてワープロ時代といわれる。ワープロは、確かに便利であり、私たちのいろいろな仕事も手っ取り早く片がつく。私は、ワープロのもつ便利さや迅速さを否定するつもりは少しもないのであるが、ワープロの利用

とともに私たちはもう一度書く文字の美しさや、それがもつ温か味を取りもどす時ではないであろうか。

コンピュータの発達によって資料の整理や分類もきわめて能率的になり、ぼう大な数の計算もまたたくまである。そしてコンピュータによって今や外国語の翻訳も容易にできるようになると聞く。しかしコンピュータがどんなに発達しても、私は、外国文のきわめて微妙な翻訳は不可能なのではないかと思う。コンピュータは、あくまでも機械であり、人間の頭脳とはちがう。人間は単に理性だけの生物ではなく、感情と意志をもち、さらに宗教の領域においてさえ生きているのである。このような人間の、人間だけに よる翻訳と、コンピュータによる翻訳はまるでちがってくるであろう。もちろん単に機械的ともいえるような外国文（例えば商品の例示等）の場合は、コンピュータによる翻訳で十分であろう。しかし、はたしてコンピュータが、豊かな文学の世界や、深遠な哲

学の世界、また情操豊かな芸術の世界、はたまた永遠な宗教の世界のこともを、どれだけ理解し、把握することができるであろうか。きわめて疑問である。

もはや文化は映像文化の時代に入り、書物はだんだんと読まれなくなり、またすたれてくるような印象を与える。しかし私にはそうは思えない。テレビによる映像の世界は、確かに楽しく、うるさくとも多い。しかしひとりひとりの人間にとって、ほんとうに大切なものはそう多くはなく、今こそ私たちは、主体的に、映像文化のなから自分に必要なものを選択しなければならぬと思う。私たちが苦勞してえたものだけが、私たちの身につくのであり、身になるのである。このような意味で私は書物はなくならぬと思うし、苦勞して読む書物は自分の身につくし、身になると思う。

今日は情報社会である。ここでも私たちはあふれる情報にふりまわされるのでなく、自分にとって大切なものだけを選択すればよいのである。

私たちはこん日自然科学の発達でさまざまな機械のお蔭をこうむっている。しかし私のクラスのある学生は、「機械は死なないが、人間は死ぬ」と言った。千古の名言である。人間は機械とはちがうのである。機械は機械であり、人間は人間である。私たちは自分の生命さえ自分ではどうにもできないのである。しかも人間は自己の有限性の外に出て、自己の有限性をこえて、永遠を想うのである。人間は身体をもった生き物ではあるが、精神をもった尊厳存在なのである。精神の豊かさ、精神をもつ人間の創造性、このことを私たちは今、同志社教育において再認識すべきではなかるか。

## 個と総体

私たち人間は個人として存在するだけでなく、家族の一員であり、社会の一員であり、世界の人類の一員である。従って私たちは、自己自身であるとともに、総体の一員である。むしろ私たちの存在は、他の人々との共なる生活（共存）において成り立っているのである。私は、同志社教育は、このような個人と総体ということ、大きくいえば個人と世界ということを念頭においた教育でなければならぬと思う。いいかえれば、確く主体性に立ちながら、世界的視野においてものごとをとらえ、考えていかなければならぬと思う。

このような個と総体ということは、別の言い方をすれば、特殊性と普遍性ということでもある。同志社がキリスト教主義教育をかかっていることは、同志社の特殊性であるが、それと共に同志社が他の大学や中学校と同一規準のカリキュラムに従って教育しているということは、同志社の普遍性である。同志社教育においては、この特殊性と普遍性という両者が保たれ、受けつがれていかなければならない。もし同志社のキリスト教主義教育が失われたとしたら、それは主体性を失った人間のようなものとなってしまい、同志社教育はあつてなきがごときものとなるであろう。

さらにこの個と総体ということは、学問技術の専門化と、学問技術の目的や価値ということとしてとらえることができる。こん日、学問や技術がますます専門化するにつれて、その学問や技術が巨視

的にものごとを見ることができず、なんのための学問であり、なんのための技術であるか分からなくなってしまう。つまり、学問あるいは技術が、その目的なり、価値を見失ってしまうのである。そのよい例が、もし自然科学者が人類全体の生命の尊厳と幸福という目的や価値を見失って、ただ研究のための研究に打ち込むとしたら、彼らの発見や発明は人類の滅亡につながるのである。

時代はますます専門化していく傾向があるが、同志社では広い視野に立つてものごとを考えることができる人間の育成に力を注ぐべきではないであろうか。このような意味で教養科目の重要性の強調は、いくら強調しすぎることはないのである。つぎに具体的な提言を三つしよう。

### キリスリ者教授の養成を

大学時代に教会の門をくぐる学生の数は、かなり多いようである。私は、教授先輩の諸先生が、これらの学生の宗教的情操の育成に力となっていただけだと思ふ。あるいは彼らの教会生活が実りあるものとなるために、ご尽力頂けたらとも思ふ。

### 新島先生の遺志の継承

大学内に医学部を創設することは新島先生の夢であったであろう。先生が同志社病院と同志社看護婦学校を設立されたことには、その背景にこのような夢があったからではなからうか。

こん日、医学の進歩はことに目ざましく、日本は世界の最善国になったという。そして他面、生命の尊厳への思いの低下が叫ばれ、医の倫理の向上が求められている。このような問題への取り組みは宗教の立場から、ことにキリスト教の立場から、はじめて真摯になされるのであろう。

今や同志社の校友同窓の数は二〇万人にのぼるといふ。学の内外の総力を結集すれば、医学部の創設と、同志社病院と看護婦学校の再建は必ずしもむずかしいことではないであろう。

### よりいかに発展を

同志社の国際性はつねに叫ばれるところ。年頭の新聞紙上では、経済大国の日本の責任の一つとして開発途上国に対する物心両面の援助の緊急性が指摘され、共存共栄の道こそが、世界平和に貢献するものであると論じられていた。

人類はやがて二一世紀に入るのであるし、同志社も創立二〇〇年に向って進んでいる。こん日の世界の重要な課題のひとつは、開発途上国の人々の生活水準の向上と文化の発展である。このことに関連して医療奉仕は切迫した問題である。

大学を中心として、女子大、中高校の教職員からなる東南アジア・アフリカ・中南米センターの設立はどうであろうか。ここで、これらの国々の政治、経済、科学、文化、宗教等の諸問題が研究され、討論され、やがて援助の方策が立てられ、それが実行に移されていく。そして学内の学生生徒もできる範囲内でこの援助活動に参

加していく。このような奉仕活動をなすことによって、実は同志社人自身が恵まれ、心の豊かさを与えられていくであろう。またこのセンターの設立によってこれらの国々からの学生の受け入れも容易になるであろう。

### 謙虚な心

コリント人への第一の手紙三章六節から七節につきのような聖句がある。「わたしは植え、アポロは水をそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。だから、植える者も水をそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである。」かつて恩師大塚節治総長が、なにかの折に、教育の基本をあげたいとて、この聖句を引いて、お話になったことがある。教職員のある者は、木を植えるであろう。そして他の者はそれに水を注ぐであろう。しかし大切なことは、学生生徒が育っていくのは、それは神がお育てになるのだということである。同志社教育で、私たち教職員は、ああもしよう、こうもしようとして心を砕き、努力する。そしてともすれば、焦ったり、いらだったりなどする。しかし、教育の基本は、神が学生生徒を育てて下さることなのである。だから、私たちは思い煩いをして、謙虚な心になって、祈り、努力しようではないか。新島先生が始められた同志社は、神の仕事であったから。

(大学神学部教授)

### 同志社談叢 第六号

#### 論 文

- 磯貝雲峰の生涯と文学……………河野仁昭  
『荒村遺稿』未所収松岡荒村同志社時代の作品……………天野 茂  
星野徳治の日記とその時代……………相川尚武  
棚あげされた同志社憲法……………和田洋一  
同志社と香里学園の合併問題……………喜多正明  
—香里所有の資料を中心に見た—  
「新島襄旧邸」保管の石鏃をめぐる……………鈴木重治  
—石器時代の環境と文化—

#### 資 料

- 同志社常務委員会記録  
自・明治三十七年四月廿七日  
至・明治四十四年七月十日  
『同志社談叢』既刊総目録  
新島襄に関する文献ノート・その五……………河野仁昭

(頒価一、〇〇〇円)

発行・同志社社史資料室 取扱い・同志社収益事業課

(電〇七五―二五―三〇三七〜八)

# 田辺開学と二十一世紀への展望

森 浩 一

一、田辺校地に私が最初足を踏み入れたのは、一九六六年十二月四日のことだった。足を踏みいれるなどとは大袈裟なと感じる人は、今日見るような開かれた校地が昔からあったと錯覚している。そのころは雑木林や竹藪の連続で、小径もほとんどなく、踏査にいられている私でさえ、たちろいたほどだった。

私が訪れたのは同志社本部からの要請で、校地の入口部分の天神山の崖面に一部露呈している弥生時代の遺跡のひろがりの見当をつけることと、そのほかにもどのような遺跡があるのかを調べることであった。それ以来、私の田辺校地通いが始まった。おそらく大学関係者としては、田辺校地の原初の姿から造成の過程などを、それも多少は第三者の立場で見守ってきた数少ない人間であろう。

二、一九七〇年前後は、大学人のあいだでも田辺校地への関心はとばしいと私は感じた。それに具体的な利用計画なども進んでいなかった。だから相談するところがなかった代りに、自分なりの理想を描くことはできた。

理想というのは、よく世間で問題になるように、遺跡を邪魔者扱いして破壊するのではなく、それを校地に取込んで生きた教材として利用するとともに、その場所を緑の空間として確保しようという

ことであった。

天神山遺跡の発掘のと数年して、校地学術調査委員会が組織され、代代の大学長が委員長を務められたから、遺跡の確認と処置などはスムーズに進行した。私が愉快に思うのは、大学内の遺跡のことは当該の大学で対応し、対応できるのが大学自治の原則から当然とするこの実践は、やがて他大学にも波及した。今日では東京大学、京都大学、九州大学など十数校に類似の組織がもたれている。

最近、大学の都市郊外への移転は盛んに計画されているが、遺跡問題で計画が暗礁にのりあげた例も耳にしている。もちろん田辺校地とは遺跡の数に違いのあることはわかっているが、取組みの姿勢と私流に言えばノーハウの問題にもからんでいる。つまり開発計画が完成したあとで遺跡の存在がわかると、遺跡保存のために多少の手直しはできても全面的な計画変更は無理であり、発掘に多大な費用がいるばかりか、遺跡も破壊される。

田辺校地の開校時には、校地内の遺跡地図を要所要所におく計画である。まだ遺跡内の整備は完了していないが、見学あるいは散策はできるようにしている。弥生遺跡、古墳群、中世の居館などはぜひ多領域の教科で利用してほしいし、それらの発掘報告書は図書

館にある。また出土遺物や関連資料は自然系等実験実習棟の一階と二階にある考古学陳列室に展示してある（五月開室予定）のであわせご利用下さい。もちろんかんたんな内規さえ守ってもらえば、学外の方々の利用も可能である。

三、新島裏の同志社設立の労苦にはくらべるべくもないが、田辺校地の開設が同志社にとっての画期であることは言うまでもない。だが忘れていけないことがある。大都市近郊で交通の便利な土地、しかもこれだけまとまった面積の土地は、今後どれほどの予算をつんでも入手は不可能だということである。田辺校地の購入にふみきった当時の同志社関係者の英断は記憶すべきだと思う。

同志社の先人たちは広大なキャンパスを確保してくれた。それほどのように生かすかは我々の問題であって、これから必要なのは多少の失敗をおそれない実践であろう。私に限ったことではないが、例をあげるならば遠隔地で発掘とか調査や合宿とかをする場合、何から何までを計画して運搬することはできない。予算のとぼしい場合は、土地の役場や中学校を訪れ、どのような利用できる資材があるかとか、現地で調達することがよくある。

重要なのは、その土地で、どのような目的の研究や練習を果すかの大目標であって、細部は行動を起しながら整える。だから調査とか合宿の経験のとぼしい分野の人たちには、今回の田辺校地利用についても、いくつかの細かい点に関心がうつつて、大目標はどうだったのかと私に感じさせた発言がある。

今後のことがあるので私の気持をそのまま書いておく。火事に遭った。中で子供の泣きさげぶ声も聞える。それを取囲んで、火を

消すのはバケツでよいとか、ホースの方がよいとか、いろいろ批評の発言はあるが、その場面でほしいのは、頭から水をかぶって火の中へとびこむ人間である。田辺校地の利用に関係してひらかれた文学部教授会でそういう感想をもつことがあった。

四、田辺校地の利用が始ったとはいえ、もちろん充実すべき点、手直しすべき点は今後いくらかもでてくるだろう。そこで二十一世紀の大学に向けての理想をいくつか述べよう。

昨年十二月、稗つき節で名高い日向の椎葉にかけた。そのさい案内いただいた椎葉村助役のK氏が、車を運転しながらさりげなく青年のころを回想された。山村の青年であったK氏がふとある大学の総長の書いた「若者とは勉強するものだ」という言葉に接して発奮して大学に進んだと説明された。こういう場合、「勉強の中味は何だ」とか屁理窟だけというのは若者の喪失者である。

生物としての人間の齢がふえていく加齢現象はいたしかたないとして、常々今の学生、さらにはこれから同志社大学を希望する若者たちの心情や興奮の共感者であることは、大学人としての重要条件であろう。といって私は学生たちと酒はのむことはあっても、一緒にディスコをのぞこうとは思わない。これもむづかしいことだが、二十代、三十代であっても、心の老齢をおぼえたと若者に刺激をあたえることはまず不可能であろう。

K助役の話は、大学にとっての総長や学長の在り方をも示唆している。予算や建物も大切だが、教学の牽引車としての役割である。何でもない言葉が見えないところで「同志社へ行きたい。同志社で学びたい」という発憤をよびおこさせる。もちろんそういう言葉（思

想)は、総長や学長個人の問題だけではなく、大学という知的喧嘩の坩堝が冷えているか、赫々と煮滾っているかにもよっている。

五、物事にたいする価値観は時代とともに変わってくる。ある時、テレビで東大寺の老僧が話されているのを聞いていた。話がある仏像の修理におよんで、文化財としての修理では申分ないのだが、仏像のかたむきがほんのわずか違ったので礼拝者への目線が変わってしまったと指摘された。仏像を文化財とか古文化財とよぶのは古さとか珍しさなどの価値観からである。だが礼拝者とながる目線を重視すれば信仰財とよんで当然である。

これなども、太平洋戦争後の表面的な文化重視の一つのあらわれであって、千年以上も信仰の対象でありつづけたものを、一面的に文化財とか古文化財とよび、その本来の姿を軽視していたことへの反省であった。お寺のパンフレットに、よく、文化財の一覧表<sup>6</sup>などとして仏像を列挙してあるのも、信仰の場としては奇妙である。

博物館にある仏像は文化財で、寺におかれた(収蔵庫の意味は複雑だ)仏像は信仰財というのは、今後信仰の問題ともからんで議論がわくだろう。同様に大学においては學術財という言葉が創られるようになってきた。學術財とは宗達やセザンヌの絵画のような美術的価値はなくとも、大学(もちろん所属の大学人)が研究活動をはじめとする大学の活動で生みだしてきたものであって、大学は學術財を保管し、整理し、学内外の利用に役立つ施設を作りはじめてきた。

東京大学の総合資料館はまずその第一号であって、ここには明治初年のエドワード・モース教授の研究にともなう學術財としての発

掘遺物、写真、図面、ノートなどが一部は陳列し、他は収蔵されて、求めに応じて利用することができる。

私は二十一世紀の大学にとって中心施設となるのは総合資料館だと考えている。セザンヌの絵画などを購入して美術館を作れというような案も話のうえでは可能になるが、お金の点で不可能というだけでなく、大学が設けなくとも、各地の美術館で鑑賞すればよい。ただしこの場合も、教員や卒業生などにある目標をもった一括コレクションなどがあれば話は別だ。先に書いたように、それは広義の大学の活動で生みだされたものである。

総合資料館というのは、予算があり施設があるから実現できるというのではなく、保存すべき學術財がないとできない。學術財というものは、予算があるからミレーの落穂ひろいを購入しようというような発想では創造できない。大学人の活動によってのみ生みだされる。私たちの関与する発掘資料はもとより、単行本や翻訳のもと原稿、学史にのこる実験の記録や装置など多岐にわたるだろう。

二十一世紀の田辺校地では私が教壇にたつことはない。だがそこでは、図書館と総合資料館をタテ系、ヨコ糸のように連動させ、教科も本当にしているものと、明治以後の惰性でやっているものを峻別し、さらにいえばもっとも知的影響をうけやすい新入生には、多くの學術財を生みだし、その時点でも生みつけている人が講義を担当しているという情景が展開してほしい。大学の充実は同志社のためだけではない。大学が研究の活力を失い、国家の研究機関の後塵を拝するようでは、国家の将来にも輝きが失われるであろう。

# 「豊かな」大学に向けて―田辺移転後の課題

深 田 三 徳

くった外側の機構が大学にメスを入れる」必要性があるかどうかといった厳しいことまでも論じられている（『理想』一九八四年四月号、四二―三頁）。

大学の問題がこのように論議の的になっているのは一九六〇年代の大学紛争時とはやや別の意味においてであり、大学がその後の新しい波に直面していることが関係している。つまり同年齢層の三五パーセントの大学進学率、一千にもなる高等教育機関の数といったことに典型的に示されている大学の大衆化状況、過激化する受験競争、それに関連する学生の意識や行動様式の変化、さらに社会全体の急速な変化といった波である。

このような新しい波の原因や背景の問題はともかくとして、今日、大学は学生たちにとって就職や社会的プレステイジへの手段として映っており、それに関連して、大学が本来もっている知的教養ある市民や専門職を育成する教育的機能、知識を開発し伝達する

わが国では、近年教育論議が盛んであるが、高等教育機関の一つである大学の問題も例外ではない。大学教育の在りかたが議論されるようになってきていることは、ここ一、二年の雑誌の大学特集をみただけでも明らかである。「曲がり角に立つ大学教育」「転機に立つ大学教育」「教育』を問う」「眠れる森の大学生」「現代大学生氣質を論ず―大学は大学たりうるか」「大学生諸君?!―いま、大学をリポートする」といった特集タイトルはその一例である。これらでは知的好奇心や学問的意欲に欠ける大学生の増大がいわれているだけでなく、大学の自己改善能力や自浄能力の欠如、大学や大学教師の間における競争原理・業績原理の欠如といったこともいわれている。さらに「今のような状態が何十年も続いて、大学はどんどん斜陽化していく」なかで自浄作用が働くかどうかとか、「大学人がつ

機能、そして社会や政治に対する啓蒙的機能が相対的に低下してきている。またこのような傾向とも関連して、すぐれた建学の精神、理念をもってきたはずの私学の個性も失われ、どここの私学の卒業生も似たり寄ったりであるとか、大学教育よりも企業内教育に期待しているといった財界人のことばも聞かれるようになってきている。同志社は田辺移転を契機にして「豊かな」大学への一步を踏み出すのであるが、同時に、近年やや失われつつある「大学らしさ」や私学としての個性ある教育をとりもどすという一層困難な課題をも背負っているように思われる。

## 二

大学の大衆化がはじまる二十年ほど前の同志社大学はすでに狹隘であり、学生たちの落ち着き場所といえは、サークル・ボックスか大学周辺の喫茶店ぐらゐであった。食堂に入り切れず、教室で弁当を広げている女子学生の姿は気の毒であった。その後二十年も経て人々の生活や住宅水準は大幅にアップし、学生下宿もマンション風のものが好まれる時代になっているのに、大学の教学条件はそれほど変わったわけではなかった。大学キャンパスはいつも込み合っており、教育施設も、体育施設を始めとしてきわめて貧弱であった。田辺移転は、その意味では「豊かな」大学へのスタートである。

しかし田辺移転は「豊かな」大学への出発点ではあるが、「豊かな」大学への変身ではない。研究教育施設や設備の面ではまだ改善すべき点が多々残されている。とくに今出川校地の諸施設については、整備充実の必要がある。例えば、ゼミ用小教室の完備、階段教

室の増加、さらに学生が学部への帰属意識をもてるような学部専用の読書室・談話室などの設置（法学部であれば、判例集・法規集・法律専門雑誌・基本的な専門図書を備えたもの、法職講座用の学習室など）が考えられる。また学生一人一人には個人ロッカーぐらゐあってもよい。

それよりも一層重要な問題は、学生教員に対応する教員数や研究費図書費の問題など、基本的な研究教育条件の面でまだ不十分な点があることである。とくに大量の学生を受けもつ社会科学系の学部では少数の教員によつてすべてがまかなわれており、問題がより深刻であるように思われる。これらの研究教育条件の面で「豊かな」大学をつくることのできるかどうか重要な鍵であるように思われる。

## 三

「豊かな」大学づくりとともに、もう一つの課題は、近年やや失われつつある「大学らしさ」や私学としての個性ある教育をとりもどすことである。そのためにはまず教育理念を明確化する必要があるように思われる。しかし同志社の教育理念とは何かという問題は簡単な問題ではない。それについてはいろいろ立場からの議論があるであろう。重要なことは、従来の理念を尊重しながら、まず具体的問題を敏感に感じることであるように思われる。今日の大学は特殊技能や技術を教える専修学校、語学学校、司法試験等の各種資格試験にパスするための予備校、またカルチャー・センターの文化講座・教養講座などに囲まれている。さらに豊かな出版文化の産物としての大量の書物・テキストがあり、また情報手段や機器の発達

の結果としての一流講師によるテープ講義、ビデオ講義などもまわりつつある。放送大学もすでに開始している。学生は特別のインセンティブがなければ、大学の講義にでかけなくてもすむ状況にある。大学はこのような新しい状況のなかで魅力ある独自の教育を求められているといえる。それゆえ各教員には、一人一人の学生に質問の喜びを感じさせることができるような講義の工夫が必要であり、同時に講義に連結した演習の設置とか、ゼミナール等の小クラスでの教員と学生との対話などが一層重要性を増しているように思われる。

#### 四

ところで田辺移転後の具体的課題には大学レベル、学部レベルのものがあり、それらはすでにそれぞれの部門で検討され始めていると思う。大学レベルでは、今出川校地の整備の他に、一般教育、二部教育の問題などがある。前者は田辺校舎での教育の中心になるものであるが、その中味が豊かで魅力あるものでなければ、折角の素晴らしい施設・設備も生かされないことになる。近年、学生たちの間には一般教育軽視の風潮がみられるが、一般教育の充実のためには、まず一般教育の担当者たちがいろいろな意見や疑問を自由に交わし議論できる場の確立が必要であるように思われる。

次に学部レベルでは、移転にともない、専門教育のキャリアラムの補修が必要になるかもしれない。またこれを機会にして、各学部の専門教育の理念の再検討も可能であるかもしれない。法学部であれば、仮に一つの目標を、国際社会でも通じるリーガルマインドを

もった人材、広い視野のあるバランスのとれた人材の育成におくとすれば、実定法科目のみでなく、外国法・基礎法・政治学等も重要視されるべきであろう。また時代の要請やトピックを扱う特殊講義の充実、語学教育の在りかたの問題等も検討される必要があるかもしれない。

学部レベルのもう一つの問題は、欠員の補充、および優秀な人材の確保への一層の努力の必要性である。研究教育において優れた人材を発掘・養成し、それによってスムーズな新陳代謝を計ることは簡単なことではないが、それは大学の研究教育レベルの維持向上のために、また大学が時代の要請に柔軟に対応できるためにも不可欠なことである。また外国人教師の採用も、大学の国際化にむけて一層必要なことであるかもしれない。

#### 五

これまで田辺移転後の課題についていくつか感想めいたことを述べてきた。最後に、よく知られたことではあるが、これらの課題に取り組みにあたって大学がきわめて厳しい環境のなかに置かれていることもまた再度確認しておく必要があるであろう。一方では、学生納付金が頭打ちに近い状態にあり、国庫からの私学助成も将来それほど期待できないところから、大学は今後一層効率的な経営を要求されるであろう。他方、臨教審の提言や答申に代表されるように、政府や財界からの大学への要求や注文は今後ますます厳しくなっていくと思われる。また学生急増期の後にくるであろう急減期においては、わが国の私学は苦しい生存競争のなかに置かれるのである

う。大学の評価も一層厳しくなると思われる。私学同志社の本当の意味での評価もその時点で始まるであろう。

今日は国内的にも国際的にも将来を展望しにくい不透明な時代であるが、同志社は「豊かな」大学、「大学らしい」大学、私学らしい個性ある大学であって欲しい。そのためには教員、職員がそれぞれの職務を果たすだけでなく、柔軟な思考法でもって創造性を発揮



『キャンパスの年輪—同志社今出川校地』

今出川校地の110年の歴史を、多数の美しい写真を用いて、目に見えるように描いた軽妙なタッチの同志社史。

著者名・河野仁昭 写真・秋山真邦ほか同志社大学出版部刊。

B5判、194ページ。定価1500円。

取扱いは同志社収益事業課、電話 (075)251-3037、3038

する必要性があるように思われる。また学生や教職員のさまざまな個性・能力・考えを尊重するという「自由な雰囲気」を失わないことも大切であるであろう。「自由な雰囲気」はこれまでも同志社の活力の源であったはずである。田辺移転後においても、それは大学の貴重な伝統として長い間保持しつづけたものである。

(大学法学部教授)

同志社の四季

明治・大正・昭和の星霜をきざむ同志社  
キャンパス—移りゆく四季の再現、同志  
社人待望の画期的豪華写真集！



●山田興氏(昭年39和卒業)が5年の歳月をかけ、撮り続けた約2000点の作品より厳選 ●迫力ある鮮明なカラーワイド図版78葉・全192頁/A4判・ソフトカバー

定価 3,800円 送料350円

発行所 光林社出版

TEL (075) 441-6793

# 同志社の将来

—田辺開学にあたって—

田辺のキャンパスをどのように活用するかが同志社の将来を決定する。

新島先生は百年の大計といわれたが、われわれが大学の将来について考えるとき、少なくとも五〇年後の学問はどうなっているか、そして学問をめぐるまわり社会的環境はどうなっているかについての洞察が必要である。大学の管理者の主たる責任は、そのような洞察にもとづいて大学の方向づけをはかることにある。

五〇年後の世界を考えるにあたっては、現在の技術進歩のすう勢や学問研究の動向をとらえ、自己のもつ判断力を最大限にはたかせることが必要である。しかしそれと同時に研究や教育についてはつきりした理念をもたなければならない。なぜなら五〇年後が来る前に、われわれの世代のものはみな、五〇年後の世界のあり方に多少とも貢献しつつ、死んでしまうからである。こうなるであろうと

榎原 胖 夫

いう判断と、こうなつてほしいという理想とは一〇年後ならともかく、五〇年後については完全に分けることはできない。

私は予想屋でも未来学者でもない。未熟な知恵しかもたない経済学者である。過日「経済学者は聖職者か」と題する経済学批判のエッセイを読んだが、それによると経済学者と牧師はよく似た存在だそうである。「かれらはともに未来がどうなるとかああなるとかか予想して人々に安心や不安を与えるが、かれらの予想があつたためではない」のだそうだ。そこで私もあたらぬ、五〇年後の、私の死後の世界をうらなつてみよう。

× × ×

五〇年後の経済社会では、サービス化がすすみ、無形の財の役割

が高まり、情報や知識や技術（知識や技術はシステムティックに蓄積された情報のことである）が経済の主役になっていっているであろう。もちろんハード・ウェア関連の産業も存続するであろうが、基礎素材型産業や自動車、家庭用電化製品などは、今日の発展途上国でつくられ、日本はそれらの輸入国になっていであろう。日本には加工組立型、技術・資本集約型の高付加価値産業がのこることになる。新しい技術の開発は加速度的となり、創造的な仕事すなわち新しい情報を生み出すような仕事はいつそう高く評価され、日本は世界の主要な新しい情報の発生源として横能しているにちがいない。

日本のなかでは二つの地域が世界的な注目をあつめているであろう。ひとつは筑波であり、もうひとつは京阪奈丘陵である。二つの研究・学園都市はボストン周辺や、ノースカロライナの研究学園都市とならんで、世界の新しい情報発生源となっている。ここで発生した情報は、求めに応じて全世界に流される。世界はこれらの情報を喜んで買い、多額の金を支払うであろう。「むかしハリウッド、いまデータ・ベース」といわれるように、情報の発生源はいつでも金があつまるころなのである。

そのころには京阪奈丘陵地に約一〇〇万人の人たちが住んでいるであろう。そのうち一〇万近くが直接間接に研究関連産業で働いている。研究所群のなかで、もっとも北には京都市域にサイエンス・パークがあり、新技術の普及と啓蒙に一役買っている。日曜日には家族つれの客でにぎわうが、その他の日は小学生や中学生の見学が多い。

その南には教育・研究機関である同志社がひかえている。緑にかこまれたすばらしい環境の広大なキャンパスに数多くの研究棟と教室棟がある。体育施設は十二分にととのっており、一部は市民にも開放されている。さらにその南の木津川左岸には、大小おりまぜて数多くの研究機関があり、その数は数百におよぶ。国立のものもあり、自治体のももあり、財団や民間企業のものもある。それらはいずれも独立性を維持しているが、同志社大学もふくめて研究機関のあいだには太い回線がめぐられ、情報の交換は迅速におこなわれる。また研究者相互の人的的交流も盛んである。

もちろん研究所は自然科学系列のものばかりではない。社会科学系列や人文科学系列のものも数多い。もっともそのころには自然科学、社会科学、人文科学というような分類は古くさいものになっている。研究の世界では従来の学問分類そのものが次第に意味を失ない、実際の研究は研究目的に応じた最適規模の編成で、インターディシプリナリーにおこなわれる。たとえばある種の交通問題にかんする研究は経済学者、社会学者、土木工学者のチームで行なわれているし、不動産研究は、法学者、経済学者、都市工学者のチームですすめられている。地域研究はもちろん最初からインター・ディシプリナリーである。そして研究者はひとつないし複数の研究チームに属するとうかたがふつうになっている。

同志社大学は、ごく一部の組織が今出川に残るだけで、大部分は田辺に移転している。最初は工学部だけの移転であったが、工学部だけでは研究上も教育上も総合大学の利点を生かすことができないと判断されたためである。工学部の学生も他学部の授業をうけるこ

とによって大きく生長するし、他学部も工学部の授業をとることによって伸びる。また二十一世紀の学問が従来の学部学科制度にはおさまりにきれなくなったことも事実である。中間領域がいちじろしく拡大し、研究がインターディシプリナリーなかたちで展開されるようになる、研究組織としての学部制度は崩壊する。

教育のための研究者の組織として、研究者は十名前後のデパートメントに属する。現在の学部よりははるかに小さな組織で、そこで基礎的な科目の提供が決定される。

一方学生は、学部に入學するのではなく、同志社大学に入學する。同志社大学に入學した学生は自分の関心にしたがって、いくつかの基礎的な課目を履習し、そのなかから、自分に合った専門領域を選んていく。

同志社大学で強調される教育目標は、何にもまして、学生の創造力をゆたかにはぐくむということである。そして副次的な目標として、国際的感覚の育成と、美術・音楽、スポーツなどを楽しむことができる教育である。それらが高度情報化社会が求める人材である。

そのためには下級生にたいする講義は綜合化されなければならないし、いわゆる教養課題は、芸術、体育関係の科目もふくめて充実されなければならない。学生に海外研修の機会をひろげることも必要であろうし、フィールド・トリップもあつた方がよい。

上級生については個人研究の奨励とセミナー制度の拡充がはからなければならない。また上級生や大学院生にはすでに述べたいンター・ディシプリナリーな研究チームに参加する機会が与えられる

べきである。(榎原胖夫「これからの私学」同志社時報七十六号、一九八四年)

学問と教育についてはすでに国境の壁がなくなっている。言語の障壁は、高性能コンピュータによって大きく低められた。機械にむかつて母国語で話せば、どの言葉にでも翻訳されてただちに返ってくるシステムができあがっている。教授陣も研究者たちも、また学生も国際色ゆたかで、どの大学出身であるかはもとより、どの国の出身者であるかも問題にされなくなる。問題なのは、かれらの創造能力だけである。かつて経済学者のアルフレッド・マーシャルは、「人間は物質的なものを創出することはできない。精神的道徳的な世界では人間は実際に新しい観念を生産することができる。」(Principles of Economics Book II, Chapter 3)と述べたが、そのことは五〇年後も変りはない。

ついでながら、そのころ同志社大学には中央図書館が失くなっている。京阪奈丘陵地のどこかに、おそらくは地下に、国立の資料収蔵庫があり、すべての資料は小さなディスクにはいつている。各研究機関にはコンピュータの端末があるだけである。端末機のボタンを押すと、資料の検索が簡単に行なわれ、必要とあれば、資料のコピーが打ちだされる。ごく古い貴重な書物をのぞくと、書物のかたちで保存されるものはほとんどない。

× × ×

このような将来の学問研究のすがたと京阪奈丘陵地帯を考えると

き、私の頭には同志社の進むべき道が、きわめてはつきりしたものにうつる。同志社は迷うことなく田辺校地の活用にはむかって前進するべきである。それが二〇〇年の大計というべきものである。現在同志社が各地に保有している不動産など、固定的に考へる必要はまったくない。経済的実用的判断にたつて早急に処分するべきである。今出川のごく中心的な校地をのぞけば、全部処分して田辺につ

(大学経済学部教授)

## 扉の新島襄の遺墨について

昭和六十年の秋、西宮市の森下雪氏(同志社同窓会名誉会長 武間富貴氏の従姉妹——武間氏の母堂は、後述する鈴木清の娘)から同志社へ寄贈された新島襄の貴重な遺墨である。遺墨は代々、森下家に収蔵されていた。

書は「心ノ清キハ福」と読むものと思われる。断わるまでもなく、「マタイ伝」第五章八節「幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん」による言葉である。すがすがしい印象を与える書だ。

此の書を、新島がいつ揮毫したかは確定しがたいが、案外、明治十年前後かもしれない。「洛陽之一平民」と新島が名乗った話は有名だが、晩年にこのように署名をしたかどうか、やはり若いころであるような気がする。それはともかく、こういう署名は珍しい。

揮毫を請うた鈴木清は元の三田藩士で、廃藩置県後は神戸に

きこんでも少しも惜しくない。過去にこだわって、センチメンタル・ヴァリューを評価しているようでは、同志社の前途は暗い。同志社には為すべきことが多い。学問の発展に貢献し、有為な人材をそだてるために何をなすべきかを第一に考へること、それがいま何よりも必要なことである。

出て産業界へ進もうと志した人で、後に神戸女学院の財産共同名義人にもなっている。その関係で『神戸女学院百年史』に名が出てくるのだが、それによると、神戸へ出た鈴木はJ・D・デイヴィスに英語を学び、明治七年四月十九日、摂津第一神戸基督公会(現在の神戸教会)の設立に参加し、松山高吉ら十一名とともに、D・C・グリーンから洗礼を受けている。また、神戸女学院の創立者の一人 E・タルカットの日本語の教師をつとめ、明治八年十月二日に、タルカットやJ・E・ダッドレーに学んでいた塚田梅子と結婚した。これは神戸教会におけるキリスト教結婚式の嚆矢だといわれている。

その後、鈴木は牛肉の罐詰製造をはじめたが、明治十三年春ごろから友人と赤心社を結成して、北海道開拓事業に着手した。だから、このごろからは北海道にとどまるが多かったはずである。

いづれにせよ、時代のパイオニアであり、神戸女学院や神戸教会と深いかわりをもっていた鈴木清は、新島襄とも相識の間柄であったにちがいないのである。

(河野)

## 同志社大学の当面の課題について

島

弘

大学とは一体何であろうか。それにはいくつかの答がかえってくるであろう。すなわち最高の教育の場であるとか、新しい理論の創造の場であるとかいわれるであろう。少なくとも、基本的には、教育・研究の二つの役割があることには、比較的同意が多いと思う。

同志社大学の田辺校舎への一部移転は、少なくとも、この大学の基本的な役割を阻害せず、より発展させる方向に進められるものとしなければならぬ。

その点では、田辺校舎の創設によって、いままで分散していた大学の設備が集中するし、今出川・新町のせまい敷地におしこめられていた諸設備が、のびのびと充分なスペースにつくることがができる。そして、恐らくいままで校地の問題でできなかった新しい時代に必要な諸設備をつくり、新時代へ向けてそれに適応していく大学として発展することができるであろう。また、何よりも、学生が、広い緑にかこまれたキャンパスにおいて、のびのびと勉強し、また運動することができることは、すばらしいことであると思う。それは、若い学生たちが、将来への希望にもえて、勉強し運動をする場

にならなければならないであろう。

しかし、物事には、たえず反対の面が存在する。田辺校舎の創設によって、大学のキャンパスが二つに分かれることは、大きな問題を発生させることになる。まず第一には、当面学生にとっては大学生活の前半と後半を異なったキャンパスでおくる様になるといふことである。それは同時に、同志社大学の学生を上級生と下級生との二つの集団に分け、その間の交流を少なくしてしまうということである。それは具体的には、学生の課外活動やサークル活動その他は、上級生の経験や技能や世界観などを、下級生のそれらと交流し、そのことによって、人格の形成や知識や考え方をきたええるという意味があったし、良き意味での伝統の継承もできたのである。また、このことによって、異なった考え方や思想にふれ、それによって自分自身をきたえあげていく重要な経験をへるのであった。それは、大学生活の貴重な経験である。それはまた大学における勉強を大きく円熟させることのできるものであったといつてよい。

ところがこのような課題をもつ大学生たちの集団が大きく二つに

分化させられ、上級生の経験が、下級生に伝えられたり、年代の異なる学生が一つのことをめぐって議論をするような経験が減少することは、大学教育にとって大きな損失になるのではなからうか。

その意味においては、この二拠点化による学生生活のこのような損失をどのようにして回復させるかが、今後一つの重要な課題になるのではないであらうか。それには、何らかの形で、三・四回生と、一・二回生との交流なり、共同作業が必要となるであらう。少なくとも二拠点を前提にすれば、日常的な接触を可能にするいろいろな工夫が考え出されなければならないと共に、恐らく、夏期休暇その他を利用する形ででも、大学として何らかの工夫が必要となるのではなからうか。また、それを促進するために、何らかの行事や合宿用の宿泊設備が必要となるのではないであらうか。いままで、二拠点に伴うカリキュラムの問題は、各教授会でかなり議論されたのであるが、それを土台にした学生の交流の問題は、これから討議せねばならない問題となるのではないであらうか。

このような学生の側での二拠点化に伴う問題は、同時に教職員の側での問題を生ぜしめざるを得ないであらう。現在の大学制度は、専門教育と一般教育とに分かれ、それが密接に結びつき相互補充しつつ大学教育を形づくっている。そして、戦後数十年にわたる大学教育制度の議論は、この両者を如何に有機的に結びつけるかにあったことは、周知の事実である。同志社大学においても、各学部の問題的特殊性とその学部の教育理念をふまえた上で、それぞれ特色ある組合わせ方が行われていた。しかし、此度の田辺校地創設による二拠点化によって、この組合せが画一化する傾向があり、その方向

は、一般教育を田辺校地へ、専門教育を今出川校地へと集中させる傾向をもっている。それは、時間割や教員の移動の制限その他止むを得ざる原因によって必然的に生じるのであるが、このことが教育に及ぼす影響はどうであらうか。

このことの結果は、一般教育を一、二年次に集中させ、専門教育を三、四年次に集中させる結果にならざるを得ないことになった。しかも、一般教育担当の多くを占める英語やその他の外国語ならびに体育の教員が、田辺に研究室を有し、今出川を中心とする専門教育の教員と分化してしまうことになる。これらの教育の一貫性については各学部教授会が責任をもつことになることは、いままで通りであるにしても、この分化によって相互交流が減少し、両教育の間の一貫性がそこなわれる可能性をもつ。これは、従来多くの国立大学における「教養部」制度による欠点として指摘されていたのと同類似た欠点を生み出すのではないであらうか。しかも、「教養部」制度のような一般教育そのものに責任と権限をもつ機関なしに一貫性の欠如は、どんな問題をおこすであらうか。それは、最悪の事態としては、いまでもその傾向がみられる、一般教育の「通過機関」化を助長し、学生の一般教育軽視の傾向が生み出されることになる可能性をもっている。このために、何らかの形で、一般教育と専門教育を適切に総合化し、専門的能力の基盤の上に、現在の複雑な社会のなかで、人類の発展と幸福のために、総合的判断力をもつ教育が形成されるような方向にむかえるような制度が必要となるのではないであらうか、そのための努力をみせられるような方向が追求せられるべきではないであらうか。

これは教育の問題であるが、これは同時に研究上の問題を生み出さざるを得ない。もともと、総合大学が研究制度として有利な点は、学問の境界をこえて異なった科学が、多くの点で開連し補充し競いあうことによって、新しい学問の発展としてあらわれるし、他方では、大学院制度によって、若き研究者の問題意識が教育にはねかえり、それが又新しい問題を生み出していくことにある。ところが、今度の二拠点化によって、従来ともすれば大学院との関係がたち切られがちであった一般教育担当者と大学院との関係は、物理的にもたち切られることになってしまう。しかも、同志社大学の大多数の教員の研究室は今出川校地におかれ、もちろん大学院も今出川校地であり、一部の少数の一般教育担当者の研究室のみが田辺校地におかれることになることから生ずる弊害もある。この問題は、今後注意して弊害を発生させないよう、とくに今出川校地所屬の教員は気をつけなければならないであろう。同時に、このような問題を解決していくために、「種々の「研究所」の総合研究等を振興して、研究の綜合化による相互交流と研究と教育の相互関連化をはかるべきである。

さらに、大学事務機構の二拠点化も大きな問題を生み出すであろう。これについては、詳述をさけるが、情報化時代といわれる現代であるので、新しい技術革新の効率的利用によって、できるだけ今出川と田辺の地理的ギャップを埋めるとともに、その間における方針や目標の一致をはかるための、事務機構の民主的運営が重要となるであろう。それには、多くの実業界の成功例がみられるので、慎重に検討してみることが必要となるであろう。

以上、今出川・田辺校地二拠点化にもなう重要な課題をみてみたのであるが、同時に重視しなければならないことは、現代社会における科学・技術の急速な発展と大学における研究・教育との関連であろう。現代社会の科学・技術は、社会の発展とともに大変早い速度で展開をしていることは周知の事実であり、同時に、社会の発展の速度も、従来何倍もの速度で展開をしているのである。

このような時期に、このような急展開と共に、大学の教育・研究を展開させていかなければならないことは、社会に対する大学の責任であるとも言えるであろう。すなわち、自然科学・社会科学そして人文科学の各分野において、あるいはそれらの総合的な場において、研究を展開させ、その発展を歩すすめることは重要な使命である。同時にそのことによって、そのような発展しつつある社会の中心になう人物をおくり出すことができるのである。

このように考えれば、同志社大学の田辺校地の創設にあたって、田辺・今出川両校地にわたって、新しい科学・技術の発展をになうべき設備と研究者を育成する制度を計画的につくり出すべきである。私学としてのきびしい財政事情を前提としても、このことは重要ではないであろうか。

このためには、同志社に働くすべての人々の英知を結集し、十分に討議をつくしてこそ可能であると考える。私たちは、今後の同志社の長い発展史の基礎をつくるために十分に話し合い、新しい方向をみんなの創意で模索し、意見を一致させて、新しい一歩をきつべきであると思う。

# 田辺校地の体育施設に思う

渡辺博之

同志社建学の理念は、知育、徳育、体育にあると教えられている。学問と人間形成は、学生個々の自覚と努力に依って培われるであらう。体育、即ち健康と体力の向上には、それなりの指導者と、立派な施設及び設備が要求されるのは云うまでもないことである。

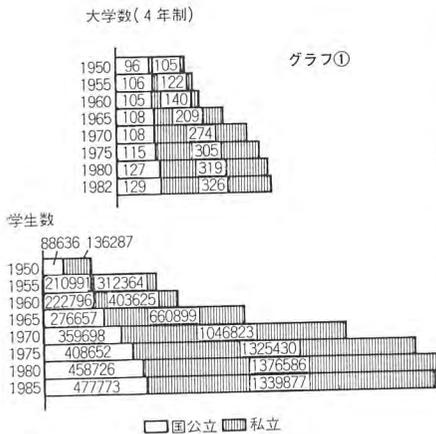
戦前、戦後から現在に至るまで本学の体育施設は、他大学と比較してお世辞にも秀れているとは云えない。

昭和二〇年代の前半に、新制大学が発足し、それに伴って単科大学の誕生を見たが、単科大学に於ても、自校のグラウンド、及び体育施設を所有しているのである。本学が関西の四大私学と云れ、東京の早稲田大学、慶応大学と肩を並べる総合大学に成長しているにも拘らず、今出川校地周辺にグラウンドを所有していないことは誠に遺憾なことである。

昔烈とも云える永い受験勉強で、自分の志望する本学に合格し、希望に胸を膨らませて入学した学生諸君が、本学の体育施設に接する時、幻滅を感じ、向学のファイトを無くするのではないだらう

か。

(For Parents 1984)に見られる如く、昭和二〇年代に新制大学が発足して以来、既に三五年が経ち、我が国の学生数も年々増加し、

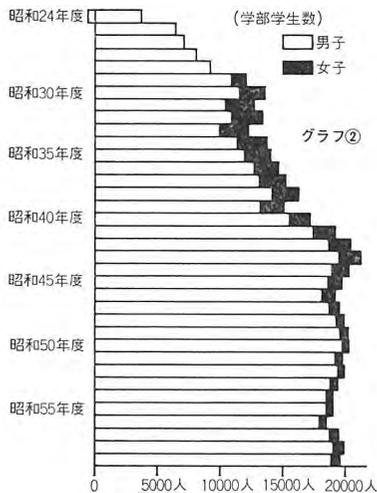


必要とされる大学数も必然的に増加を見た。(グラフ①)

一九五〇年には、国公立大学では九六校、学生数約八九、〇〇〇人が、一九八二年には、一二九校と増加し、学生数も約四八〇、〇〇〇人となった。私立大学では一〇五校、学生数約一、四〇〇、〇〇〇人が、三二六校と増加し、学生数も約一、三四〇、〇〇〇人と増加し続けてきたのである。この結果、現在では日本人一、〇〇〇人に一八人の大学生が存在することになる。これが老若男女おしなべての比率と考えると、大変な教育国であると云わざるを得ない。

(グラフ②) 本学は、昭和二四年学生数約三、五〇〇人が、昭和三五年には学生数が約二倍の六、二五〇人となる。これが昭和四三年には約二一、〇四九人と約二〇、〇〇〇人前後の学生が、今出川校地と新町校地に現在も併存しているのである。この様に我が国の学生

グラフ②



人口が年々増加し、数年後に始まるであろう大学志望生徒の急減問題があるとしても、本学の毎年の受験者数から判断して数値の変動にはあまり危惧する必要はないものと考えられる。

大学が、教育や研究を十分に満たす為に規定された文部省の設置基準は、学生一人当たりに必要な土地面積を八坪と定められている。この中には、十分なグラウンド、体育施設等が含まれていることは言うまでもない。即ち学生一人につき、一六畳の部屋が大学の敷地内にあつて、始めて十分な学問や運動が可能だと云うことになる。然し乍ら、実際に本学が今出川校地、新町校地、諸々に点在する小校地及び遠隔に所有する土地を含めても僅か八〇、〇〇〇坪である。即ち学生一人当たり約四坪の面積となるが、実際使用でき得る面積は一・三坪程度であつて、設置基準の四分の一にも満たない有様である。

約三、五〇〇人の学生で始まった新制大学から現在に至るまで、本学が購入した校地は、新町校地の六、〇〇〇坪位のものであると云つても過言ではない。初期の約六倍に当たる学生が、初期と大差ない狭隘な校地で我慢しているのである。大学としても、これを黙つて放置しているものではない。土地を求めようとしても、京都のような古い町で、しかも今出川校地周辺に何万坪もの空地がある筈がない、必要に迫られても購入する術がないのである。

新学期になると、学生の殆んどが講義の内容を期待して、狭隘な校地に登校し、それが為に全ての教室が満員となり、受講ままならぬ学生で、校庭が混雑をきたし、ひいては学生の向学心もなくなると、その後の出席率も悪くなると云うことにもなる。

正課体育は必修科目である。実技の授業には、広いグラウンドと広い体育館の保有が絶対条件である。今出川校地周辺に本学の所有するグラウンドが皆無であることが、体育実技を行なう上で一番のネックとして挙げられ、体育館も手狭である。雨天の場合等は、実技を教室に換えて講義に切り換える苦肉の策も考えなければならぬ。

本学には、第一従規館、第二従規館のプレハブ体育館が二つ、若干の屋外施設を保有するのみであるから、不足分を御所の饗宴場、学外商業施設を利用せざるを得ないのである。学外商業施設を使用するには、当然使用料を支払はなければならない。年間使用料は上の通りである。それに伴う時間のロス、担当教員の学生に対する危険防止の気配り等々、実技以外の面にも余分な神経を尖らせなければならない。

一	1,460,300円
場	610,500円
コ	3,410,160円
ー	1,281,400円
ト	100,000円
フ	6,852,360円
ナ	1,800,000円
ー	8,662,360円
代	
ス	
計	
バ	
計	
所	
テ	
野	
野	
高	
高	
送	
御	

さて三〇〇、〇〇〇坪の拡大な面積を擁する田辺校地に移転が決定して以来、二〇年の経過を見た。それが一部移転、将来全面移転を計画されているとしても、同志社二〇〇年の夢を賭ける大事業である。

昭和六一年の新学期から田辺校地で、一年次生、二年次生の開講も決定を見た。正課体育、課外体育に利用されるグラウンド、体育館の面積も約五〇、〇〇〇坪と聞く。従来使用していた今出川校地、新町校地、学外商業施設の狭隘であったスペースが一挙に解消され

るのである。緑と恵まれた環境、広大な面積の校地内で、正課体育、課外体育を存分に行なうて、健康と体力の増強を計り、強力な運動部の出現を夢見るのは体育教員のみならず、全同志社人の希望するところだろう。

本学の体育会に所属する運動部は四六部の大世帯である。それ以外に、同好会、愛好会等々と数え切れない程のスポーツサークルがある、今迄はそれ等のサークルが練習のグラウンドを求めて東奔西走の状態であった。田辺校地の体育施設が完成し、体育会、同好会、愛好会等々がグラウンド使用の調整に依って、今迄の練習量の不足を解消するのみならず、多くの学生が今迄以上の交流を持つことは誠に喜ばしいことである。

田辺校地には、他に類を見ない立派なデイヴィス記念館（体育館兼講堂）、体育館、各運動部が単独で練習可能なグラウンド等十分な施設が設けられた。今出川校地周辺では、一般学生は正課体育以外、屋外で体を動かさそうとしても、御所の饗宴場でキャッチボールか、ソフトボールで楽しむ程度が、田辺校地では種々のスポーツに自由に取組むことができるようになる。このことは運動部の練習のみが課外体育であるが如き図式が薄らぎ、空いている施設があれば、正課体育の延長として利用し、利用することに依って一般学生と体育会との交流にも繋がり、名選手も身近の存在となり、体育会に対して近親感を抱くようになるものである。

体育教員の願いは、一般学生がキャンパス内で、ラグビーやサッカーの名選手の練習する雄姿を見たり、野球部の強打者やテニスの人気選手が一心不乱でボールと取組み、又体育館では、レスリン

グ、角力の選手が汗を流す姿に接したり、はたまた、名門校との対抗戦を観戦する時、彼等も又クラスメイトであると自覚し、そこに連帯感、母校愛が芽生えることを期待したのである。

本学の田辺校地での開講は、先にも述べた如く、一年次生、二年次生である。三年次生、四年次生は今出川校地で受講しなければならぬのである。体育会に所属し、スポーツに活躍する学生諸君は、学問と練習に、今出川校地と、一時間余の隔たりのある田辺校地の二つのベースを往来しなければならぬと云う不便さが生じる。

スポーツには周知の如く、団体競技と個人競技とがある。個人競技を志さず選手達は、受講後、個人で体を鍛え、技を磨き、個人が適応するメニューを作り、それを消化することに依って成果を挙げることが容易であろう。然し乍ら団体競技に於いては、それプラス、チームワーク、連携プレイが重要な要素となってくる。

田辺校地の立派な体育施設の誕生に依って、体育会の持つ不満は全て雲散霧消したと見る。

学問と人格形成、それにスポーツを教育の精神とする本学では、各運動部の部長、監督、コーチ等、指導者は学問とスポーツを両立さすという難問題を処理し、立派な学生を育てることが最大の任務ではないだろうか。

最後に田辺校地の学舎と体育施設が、学生諸君の素晴らしい学問の場として、優雅で楽しい憩いの場として、又自由にスポーツのできる場となることが、同志社教職員の仕事であり、全同志社人の期待するところではないだろうか。

(大学工学部教授)

新島襄関係文献(抄)

「新島襄全集」全十巻(刊行中)	同朋舎出版
A. S. HARDY, LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NESIMA	同志社大学出版部
「同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意―口語改記並原文―」	同志社
森中章光編「新島先生書簡集」正・続	同志社
同志社編「新島襄書簡集」―岩波文庫	岩波書店
J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳「新島襄の生涯」	小学館
「新島先生記念集」	同志社校友会
「明治文学全集」第四十六巻―新島・植村・清沢・綱島集―	筑摩書房
J. D. DAVIS, JOSEPH HARDY NESIMA	同志社
森中章光著「新島襄片鱗集」	丁字屋書店
森中章光著「新島襄先生詳年譜」	同志社・同志社校友会
永澤嘉巳男編「新島八重子回想録」	同志社大学出版部
徳富蘇峰著「新島襄先生」	同志社大学出版部
魚木忠一著「新島襄一人と思想」	同志社大学出版部
岡本清一著「新島襄」	同志社大学出版部
渡辺実著「新島襄」	吉川弘文館
同志社社史史料編集所編	
「同志社百年史」通史編Ⅰ・Ⅱ	同志社
「同志社百年史」通史編Ⅰ・Ⅱ	同志社
和田洋一著「新島襄」	日本基督教団出版局
雑誌「新島研究」	同志社新島研究会

# 田辺開校と国際交流

市 村 真

いよいよ田辺の幕あけである。大学、女子大学、国際高校と三役揃い踏みのもとに、待つこと久しい国際交流センターの登場である。このセンターについての詳細は、まだ発表されていないが、おそらく名称からして、国際交流・留学生の受け入れなど、これからの同志社にとって一番大切な国際化という、新しい伝統をつくり出す空間の確保が現実のものとなったことは事実であろう。

## 対等の立場で相互理解を

さて、国際化の定義については、今さらという感じがしないでもないが、観念とかムードが先に立ってしまつて、中身がよくわからない。誤解を恐れず私なりに大学における国際化を解釈するならば、のちにも触れるが何も授業を英語でやりさえすればそれでいいというのではなく、大学でまず何を教えるか、何を勉強するかが国際化の中心であると思う。そして「自己は他者との関係の中でしか見えない」という点こそ国際化の意味があるのだと思う。つまり、おのれを知るためには他者を知ること——日本を知るとは外国を

知ることなのである。このような複眼思考をもつためには、人間として対等な立場で相互理解しようような国際感覚を身につけなければならぬ。

ところが最近ちょっと気にかかることを耳にした。それは、日本の急速に伸びた経済成長にも関連して、政治や経済の問題がクローズアップされてきた結果、「日本が一番いい国だ」という学生がどんどん増えてきたのだと言う。日本が一流国になったような錯覚を起こして、自己中心的になってしまった学生は、異文化に対する関心が急速に弱まり、その結果として、他の国のことなんか知らなくてもよいのだという風潮が強まっているという。ちなみに、最近の学生は外国語に対する関心が非常に弱くなってきており、外国の小説など読む学生は圧倒的に減少している。外国へ行っても、日本人経営のレストランやデパートにのみ足をほこぶ。価値観の多様化などと言われているいっぽうで、今ほど異質なものに對する関心が失なわれている時代はないとある先生は嘆いている。

もとより頑迷固陋なナシヨナリストが、国際人としてふさわしく

ないとは言ってもないが、日本人としての確固たる価値観をもつことは、異文化との対等な交流にあたって大切なことだと思う。従来のように欧米偏重の外国に留学し、もっぱら自国の利益のために一方的に先進国の優れた分野のみの学習でいいとは思えない。いわゆる先進特定国指向の交流ではなく、広くアジアを含む諸外国との共同研究や学術交流を対等な立場で積極的に展開すべきであろう。

ところで国際交流といながらも、せっかく同志社大学に来た留学生が日本人学生となかなかなじまない。交換教授で来た外国の先生も、同志社の先生と自由に教育や研究について意見を述べ合うことが少ない、と言うことをよく聞くが、このようなことを解消するために、田辺での国際交流センターをぜひその名にふさわしい場にしたものだと思う。一番国際化されなければならぬ大学の中で、このような「心の鎖国」があつてはならないと思うからである。

#### ことばのカベをのりこえて

国際交流のための条件整備については、いろいろあるが、基本的な問題として、まず財政問題を考えてみる。

私立大学の財政収入の大部分は学生からの授業料収入であり、本来それは納入する学生の教育に直接向けられるべき性格をもつ。しかるに、国際交流に要する支出をもっぱらこの学生納付金に頼っているのは問題がある。本来の目的からすれば、一定の「国際交流基金」といったものを設け、その果実で運用されるべきものと考ええる。有名私立大学の多くは、すでに多額の基金運用でこれをまかかっており、同志社大学も近い将来そのような方策をぜひ講じてほし

いし、またそうすべきであろう。

次に留学生に対する外国語教育について述べてみたい。ランゲージ・パリアについては、今さら言うまでもないが、彼らにとっては日本語の学習が多大の負担になっていることは事実なので、第二外国語に日本語を含めていただくことはできないものであるうか。

ついでに、語学に関して言えば、海外で日本留学希望者を対象とした日本語学校の充実が図られてもよいのではないかと思う。外国人学生が自国で十分な外国語教育を受け、留学に必要な語学力を身につけたうえで留学してもらいたいと願うからである。

留学生は明確な留学目的をもつことが必要であることは当然であるが、いっぽう同志社大学で学びたいという留学生がいるかぎり、その動機が何であれ、まずは学ぶ機会を与えることも大切である。

在留手続き、学位制度、それにいま述べたことばの問題に次いで、宿舍と奨学金の問題がある。田辺での国際交流センターは、研究者のみならず、留学生の宿舍問題の解決にも一役買ってもらいたいと願っているが、財政問題を考えるなら、この際、一大学一留学生寮というような固定観念を捨て、京大・立命館などと共に京都という地域に各大学共用の宿舍を設けることを提案したい。それも若い世代の国際理解を進めるためにも日本人学生との混住が望ましい。ちなみに、京都市左京区に二〇〇人も収容できる「国際交流会館」という立派な宿泊施設があるが、これは京大の外国人留学生専用であり、日本人学生はもとより他大学の留学生は利用できない。京大は宇治市に同様のものを今秋にも完成させるといふ。理想的には右に述べた通りであるが、現実には京都の住宅事情の劣悪さや、外国人に

対する不慣れから、留学生に下宿を提供する人が少ないため、適当な下宿を留学生に紹介することが困難な状態である。しかし学生部厚生課で下宿紹介リストの条件項目に外国人留学生受け入れの「可・不」欄などを設けて、留学生に対する下宿探しの便宜を計ってもらうことを考えてもいいだろう。

外国人留学生への奨学金充実については、宿舍問題より優先すべきであろうが日本人学生とのバランスの問題もあり、先に述べた「国際交流基金」の運用面での工夫が必要であろう。そのほか留学生に対する学習や生活指導面でのチューター制度の必要性についても触れておきたいが、紙面の関係でまたの機会にゆずりたい。以上何点か思いつくままに国際交流に関する条件整備を挙げてみた。

#### 留学生一〇万人構想

六〇年三月、文部省が出した「二十一世紀への留学生政策」によると、私立大学の学部レベルに留学している現在の留学生四、〇九五人を、西暦二、〇〇〇年には四五、〇〇〇人に、また国立大学大学院レベルに現在留学している二、九四三人を二〇、〇〇〇人にすることを含め、わが国に留学生を一〇万人受け入れるという。この構想に関しては、昨年十一月に開かれた京滋地区私大議長懇

権による関西私大助成シンポジウムで、東京大学教育学部の天野郁夫教授が「大学の国際化とは」という講演の中でさまざまな角度からこれにコメントをされている。私のメモにまちがいがなければ、以下のようなことが述べられている。私のメモにまちがいがなければ、以下のようないことが述べられていると思う。すなわち一九七〇年代から経済の国際化が進み、日本は政治的にも経済的にも地位が上がっ

た。一九七一年OECDの日本教育調査団の報告によると、世界参加としての教育（教育の国際化と言う意）について、日本における外国語教育をもっと実際に役立つよう改めよ、外国人教師をもっと活用せよ、留学生の雇傭を改善せよ、外国人へ大学を開放せよ、日本語による教育を外国語による教育に改めよといった点を指摘している。そして同教授は大学教育の非実用性、学位がとりにくい、外国人教師を雇わない、外国人にとって日本は暮らしにくい、授業料・生活費等が高いなどを国際化のマイナス要因として挙げている。そして留学生は水準の高い国へ流れる傾向があるとして、アメリカ三〇万人、フランス一〇万人、イギリス、ドイツがそれぞれ五万人の留学生を擁しているのに対し、日本はまだ僅か一万人の留学生しかいないと述べ、留学生一〇万人構想はそれはそれでユニークな発想であることを評価された。しかし一〇万人受け入れにはあまりにも多くの問題が未解決のままであり、この構想は非現実的であること。その大きな問題の一つはことばの問題であり、その解決にあたっては、すでにオランダやスウェーデンなどでおこなっている英語での授業をわが国にも導入しなければならぬと強調された。

#### 国際主義は同志社の原点

一〇万人留学生受け入れはともかく、いっぽうではわが国の学生も海外の諸大学に送り出し、異文化の体験を通して国際交流を積極的に行わなければならない。同志社大学では三年前から在学留学制度を設けたが、まだまだこの制度が頻りに活用されているとは言いがたい。毎年おこなっている同志社アームスト・サマープログラム

も、四〇日という短期留学（研修旅行と言うべきか）であり、これがAKPの裏返しのような形で、少なくとも一年間の留学制度として運用されれば、もつと国際交流が活性化されよう。

外国から学ぶという国際化から、外国へ何かを与えるという国際化へようやく進んできた。これからは外国と日本とで協力して何かを創造するという国際化へと進んでほしいものだ。そのためには、先に述べたように「外」を知るためにまず「内」を知らなければならぬ。さてそこで「内」とは何か。それが冒頭で述べた「大学で何を教えるか」なのである。留学生が「自腹を切つても同志社大学で学びたい」という教育をするために、ぜひ田辺を活用してもらいたいし、われわれはそうしなければならない責任を負っている。なぜなら、あれだけの巨額を投じて造った田辺キャンパスにおいて、教学の質的充実を図ることこそ最大の目標とすべきであり、「教学条件がいまより悪くはならない」程度でことたれりとはどうしても考えられないからである。

最後に、昨年二年目を迎えた同志社大学留学生会が発刊した会誌『同志社国際学生』の創刊号によせられた木枝学長のことばを僭越ながらここに一部引用させていただき、むすびとしたい。「同志社大学の原点は、国際主義にあると言つても過言ではありません。大学そのものが、もともと国際的であるわけで、一つの国、一つの地域に閉じこもつていたのでは、学問の眞の発展は望まれません。大学が持っている所期の目的を達成するためには、今後とも留学生の受け入れをはじめ、諸外国との国際交流に積極的に取り組んでいかなければならないと考えています。」

（大学国際課長）

## 同志社談叢

### 第五号

#### 論文

- 原六郎と同志社……………仲村 研  
 新島襄と柏木義円（その一）……………武 邦保  
 — 柏木資料からみる思想的関連 —  
 同志社第十代総長 湯浅八郎……………和田洋一  
 同志社女子部管理方改革について……………宮沢正典

#### 資料

- ハリス理化学校関係資料…  
 同志社理事會常務委員會記録

— 自・明治四十四年九月六日

— 至・大正七年九月九日 —

- 新島襄に関する文献ノート・その4……………河野仁昭

— 著者・筆者別 —

- 同志社に関する文献目録……………河野仁昭

「同志社談叢」既刊総目録

（頒価一、〇〇〇円）

- 発行・同志社社史資料室取扱い・同志社社収益事業課

（電〇七五—二五—三〇三七〜八）

# 田辺同志社開学への祈り

近藤十郎

## (一) 祈りの旅立ち

同志社の歴史は、「涙の祈り」から始まった。一八七五年明治八年十一月二十九日（月曜日）の午前八時。教師は新島先生とJ・デイヴィスの二名。生徒わずか六名の祈りの旅立ちであった。この祈りの旅立ちが、この祈禱会に参加して同志社開学の光栄ある責任をになうことになった人々にとって、どれほど強烈かつ鮮明な印象を与えたかは、デイヴィス自身が、新島先生の召天後一年を待たずして出版した「新島伝」の中で、次のように記している点からも明らかである。すなわち、「あの朝開校に先立って新島が自宅で捧げたあのやさしい、涙にみちた、まじめな祈りを私は決して忘れることはできない。すべての者が心から祈った」（デイヴィス著、北垣宗治訳、「新島襄の生涯」とある。どのような祈りが祈られたのか、だがどのような言葉で祈ったのか、字句を再現することはもちろんできないが、同志社教育の理想を真正面に掲げて、その実現のために献身を誓う、熱涙あふるる祈りがそこに捧げられたことは

想像にかたくない。

新島先生の祈りは、「やさしい (tender)、涙にみちた (tearful)、まじめな (earnest)」祈りであった、と言われているが、その「やさしさ」は、幾多の困難がすでにありその後も倍加するであろうきびしい条件の中で、主のわざへの献身を共にすることを誓った同労者たちへの優しい思いやりを反映する祈りであったかもしれない。また、祈りの中で流された涙は、「一国の良心」たる人物の輩出のために全身全霊をもって同志社開学に心血を注いだきた新島の、ここに至ったことに対する感謝の思いと、新たな抱負の確認から出てきたものであるかもしれない。新島先生の祈りはさらに、まじめかつ真剣な、熱心な祈りであった。計算や打算が先行するのではなく、中央政府や反対・妨害勢力とのかけひきによって理想を骨ぬきにするのでもなく、目的完遂にむかってひたむきに走ってきた先生の姿勢が、この真剣な祈りの中に反映されていたことであろう。

「祈禱会」とは言っても、始めから終りまで祈りの言葉が連ねられたのではなしに、おそらくは新島先生がまず、事の経過を述べら

れ、これが主の委託に応える大事業であること、自分はこれを主の導きと信じて一身を賭してこの事業に取り組み覚悟であること、このために共に献身・協力を願いたい、といった要請が改めて新島先生からなされ、それらの一つ一つの言葉が、そこに集まった者たちに強い共感と感動を呼び起したのである。こうした感動が祈り心を誘発し、共にいた者たちの献身の祈りとして祈られたのである。このような祈りの尊さと、何ものにも勝って人を動かす祈りの力こそ、同志社の歴史を支えてきた原動力であったのだとあらためて思わされる。

## (二) 田辺同志社の開学

爾來時を経ること一〇年、同志社は田辺キャンパス開学を決定。創設以来未だ経験したことのないほどの大規模な事業に着手した。すなわち、学術研究都市構想の流れの中で、同志社大学は、一、二年次の授業を田辺キャンパスに移し、同志社女子大学は、音楽学科を全面移転、新たに短期大学部を開設、さらに二年後以降、一、二年次の授業を漸次田辺キャンパスに移行、新学科増設をも決断した。教育研究の拠点が二つに分断されることによって生ずる種々の困難、デメリットは、当初から予測されており、この問題だけにとどまらずその他の諸条件についても、ここ数年白熱した議論が学内外でたかわれてきた。議論が議論に終らず、両者のあいだに感情的なしこりや齟齬がもたらされる場合もまあったことは残念である。しかし、同志社はともかく、一一〇年を迎えて、その新しい未来を田辺開学に賭けることになった。この道を歩む選択をし

たからには、その決断の上に立って、神の期待する同志社の新しい歴史形成に最もふさわしく貢献することが望まれてくるであろう。一個人の意見や主張が、同志社の巨大な流れに対してどれだけの有効性を持つかを考えれば、無力感を禁じえないところもあるが、沈黙は無責任と自戒しつつ、神に喜ばれる同志社づくりのために積極的に発言し、ささやかではあっても貢献できる器でありたいと願う者である。

私の思考範囲で同志社を語り、その未来の幻を見るとすれば、それは同志社のキリスト教主義教育という点に、一つの視点を持つ。これまでにも、多くの人々がこの問題を語り、同志社におけるキリスト教主義教育の形骸化ないしは欠落を嘆いてきた。しかも、それらの批判は多くの場合、残念ながらあながち的はずれのものではなかった。何が形骸化しているのか、何が欠落しているのか、何が同志社の立学の精神を曇らせ、「キリスト教の理念」を骨ぬきにしていくのか。キリスト者に対する信頼感はどうか。現代という価値の相対化の時代に、キリスト教的価値観がどのような説得力を持ちうるのか。同志社の歴史の大きな節目にさしかかっている今、これらの同志社存立の根幹にかかわる問題について、全学的な対話がなされることを切望する。

## (三) 真理と自由

先頃おこなわれた同志社女子大学短期大学部の推薦入試は、定員約一六〇名のところその約十五倍の二四〇〇名にものぼる志願者を得た。面接試験に当って、私は多少意識的に、「あなたにとっての

同志社のイメージは？」と尋ねてみた。受験生があらかじめ質問を予測していたかどうかはともかく、多くの者が「真理と自由の校風」と答えた。それでは、同志社の「自由」とは、いったいどのような自由なのか。校祖新島のキリスト教信仰に根ざした「自由」の精神が、現在の同志社教育の中でどのように継承され、語り継がれているのか。また、同志社教育における「真理」とは何を意味するのか。そのような「真理」に根ざす教育が、教師对学生の人格的交わりの中でどれほど重視されているか、その実態を聞きたい思いである。受験生の同志社に対するイメージが内実をとまなっていたかどうかは別としても、このイメージこそ同志社の良き伝統であるはずである。「真理と自由」のイメージが失われたところには、同志社教育は成立しない。それが語られず、前提とされないところには、一般の教育はあっても、同志社の教育はない。

同志社教育における「自由」とは、言うまでもなく、キリスト教的価値観、人間観に基く「自由」である。それは放縦や無定見を意味しない。「真理はあなたがたに自由を得させるであろう」とヨハネ福音書の著者が宣言する（八・三二）とき、そこには真の意味で解放された人間、何ものにも拘束されず自由、自治の精神にみたまされ、主体的に生きる自由人としての人間がうたわれている。しかもそのような自由人の育成は、人を愛し人に仕えて十字架の死を遂げたイエスの生涯のうちに啓示され、証された神の「真理」を注視することによってはじめた可能となった。新島先生の信仰において「真理」とは観念的抽象的概念ではなく、人を人として完成させるために、神が人間に対して示された誠実さそのもののことであ

った。時流に流されず自己の信念を全うすることのできる自立した人間の育成、これこそ先生の教育の最終目標であり祈りの眼目であって、それはすなわち彼自身の信仰の具現化にほかならなかったのである。

同志社教育の責任あるにない手として期待された同志社の先人たちは、いくたびか血みどろのたたかひを強いられながらも、この「真理と自由」の精神を守りぬぐために、祈りを結集してきた。この精神が同志社教育の中に確認されるかぎり、同志社は、現代のコリネキストの中で自由にはばたきことができるであろう。同志社の良さは、その寛容さ、無限の包容力、ことさらに党派をつくらず、多様な価値観を受け入れるふところの深さにある。この際、同志社の同志社たるゆえんを相互に確認しながら、また、無くてもよいものと無くてはならないもの、歴史の中に風化させてならないものを、明確に識別しながら、同志社の新しい歴史形成のために第一歩を踏み出さなければならぬ。

#### ④ 「対話の場」を確保する①

同志社の田辺移転（「田辺開学」と言うべきか）が、学内外の必要にして十分な対話が尽くされた後に決断されたことなのかどうか、十分なコンセンサスが得られないまま見切り発車をしてしまったのではないか、という意見もある。しかし、問題はその場合の議論や対話の質にあるのであって、議論それ自体よりも感情の方が先走って、結局は論議は堂々めぐり、創造的な対話がなされにくかった、という点にあるのではなからうか。

同志社を愛する思いは、だれにでも共通にあるのだから、それを共通の土俵として確認しつつ、同志社の新しい未来を開拓するために、いかなる問題でも対話の場を放棄することなく創造的決断をして行くことが肝要であろう。特に、キリスト教主義教育を、今日の同志社教育の理念の中にどのように位置づけ、それを現代のコンテキストの中でどう実現して行くか、という点については、胸襟をひらいて話し合い、最もふさわしいあり方を見出し出して行かなければならない。同志社がキリスト教主義大学である、ということは、残念ながら決して自明なことではない。どこにどのような形で、キリスト教の理念が生きているのか、出発点に帰ったところで検証してみよう。同志社のキリスト教主義教育の形骸化や欠落を嘆きながら、必ずしも積極的に対話の中で痛みをわかち合う勇気と謙虚さを持ち合わせない体質を、まず自身の自己批判としてうけとめて行きたい。対話のあるところ、必ず創造的な何かが生み出される、と私は確信する。同志社に仕え同志社を愛する者であれば、だれでもこの対話に参加できる。キリスト教主義教育の再検証という点に限定して言えば、現在の同志社教育の中で、どのような人格教育、トータルな意味での人間教育がなされているか、教師と学生・生徒が真に血の通い合った人格的な触れ合いの場を確保しているかどうか、ということが問われ直されなければならない。

#### (四) 同志社の未来に祈る

新島先生は、まさに「祈りの人」であった。祈ることこそ、彼はたらきの源泉であった。彼のはたらきを共にになった人々をひき

つけて止まなかったもの、それは単に先生の肉体的魅力だけではなく、「祈りの人」としての真摯で謙虚な姿勢であった。ラットランドにおける彼の演説に浄財を捧げた聴衆も、同志社開学前後の困難を極めた時期に、身を呈して彼を支え協力を惜しまなかった結社人も、新島先生あの涙の祈りに文字どおりとらえられたのである。まことに「祈りは力」であった。

真実の祈りがなされる場所、そこには創造への飛躍が可能となる。そのような祈りは時には実存の痛みさえともなうことがある。同志社の未来にかかわろうとする者は、互いにこのような新らしき創造への痛みを共有する勇気を持つことが要求されるであろう。神からの期待と要求に応え得る器になりたいと切に願う者である。

「田辺開学」は、実現した。しかし、それにまつわる不安や問題は、いぜんとして残っているし、これからも新たに起ってくるであろう。問題点は問題点として、大いに議論を尽くし、批判すべき点は大いに批判し合って、未だ足らざる産みの苦しみを共に苦しんで行く必要がある。同志社の未来をになう光榮と責任を思いながら、決して問題を「他人事」として看過することなく、創造的対話を率先しておこなうこと、それ以外に同志社の歴史に貢献する方法はない。対話こそ、創造の原動力である。何事にも「聖域」なるものをつくらず、決して相手を偏見の目で決めつけることなく、対話の可能性を放棄しない——そのような誠実さこそ、同志社の明日を築く力となるであろう。

(女子大学助教授)

# 田辺キャンパス開学にあたって

―女子大学を中心に―

宮 下 隆 夫

今春四月、同志社田辺キャンパスが愈々開学する。

同志社大学が全学部一・二年次の授業を、女子大学は短期大学部（英米語科・日本語日本文学科、入学定員各二〇〇名計四〇〇名）の設置と音楽学科の授業を行うことになる。約一万名の学生・教職員が田辺キャンパスで学び、研究し、働くことになる。

田辺キャンパスの開学はあらゆる面で同志社にとって創立以来の大きな変革である。

これまでに田辺キャンパスの整備に要した所要経費は、法人全体で約三五〇億円（うち女子大学五十八億円）もの巨費に達している。完成までには更に多くの経費が必要である。まさに田辺キャンパスの開学は同志社にとって世紀の大事業といっても過言ではない。

百十一年前、生徒数僅か八名で新島裏によって創立された同志社が幾多の変遷を経ながら現在学生・生徒数約三万名、教職員約二千名を擁する総合学園に発展した。そして、この量的拡大は今出川校地の狭隘さを招来し、教育環境を維持するのに必要な最低限の校地

面積（大学設置基準）をも大幅に下回ることになり、その正常化が当面の急務となってきた。校地問題の正常化なくして学部・学科の新設、再編はもとより、教育の質的充実さえも不可能に近い状態、換言すれば今出川校地の狭隘さは教育環境としては瀕死の状態になった。（もとより大学の存在は条件整備だけでなくここで行われる教育・研究の内の充実が大切なことは論を待たない）

広大な田辺校地（約百万平方米、今出川校地の約七倍、うち女子大学専用分約十二万平方米）は、このような今出川校地の狭隘さを解消し、その教育研究条件を整備する目的で昭和四十一年に購入された。

爾来二十年、田辺校地の利用方法をめぐって幾多の委員会が設置されては改組され、多くの教職員が、それぞれの時期にそれぞれの分野でこの問題に関わりをもってきた。そして漸くこの四月田辺キャンパスの開学を迎えることになったのである。

田辺キャンパスの開学により、校地問題が正常化され、短期大学部の設置と音楽学科の定員増が予定通り認可されたが、反面、本来

一つであるべきキャンパスが今出川と田辺に二分されるといふ大きな犠牲を背負うことになった。キャンパスが二分されるといふことは、精神的・肉体的負担はもとより、財政的な負担も大きくなる。

田辺校地の利用が具体化する過程においてさえ、移転に消極的意見が後を断たなかったのはキャンパスが二分されることによる不安がどうしても解消し得なかったからだと思う。田辺校地をめぐる学内の白熱した議論を経て本学は、昭和五十八年二月一日の教授会で田辺校地利用の基本方針を最終的に決定した。まぎれもなく、本学は自らの意志によって田辺キャンパスの開後を迎える。

本学にとって、いや全同志社にとって、このことが真の意味で二十一世紀に向けて新たな発展への第一歩となるかどうか、あるいはなかったかは百年後の歴史の判断に委ねる他ないが、田辺キャンパスの開学は既定の事実である。

二つのキャンパスに分れるデメリットは、全教職員の叡知と努力によって克服していく以外に方法はなく、最早このことについての議論は不要で、必要なのは一人一人が与えられた分野で最大の努力をすることである。

それが半世紀、いや百年後、女子大学に集う学生・教職員に対する現在の我々に果せられた責務であると思う。

そこで、田辺キャンパス開学に際してもう一度本学の田辺校地利用に関する討議の過程を回顧し、その意味するところを再認識することは、決して無意味ではないと思う。

田辺校地利用に関する本学の討議は、学芸学部家政学科を改組発展させて家政学部を設置した昭和四十二年に遡る。既ち家政学部設

置認可に際し文部省は、今出川校地の狭隘さを指摘し「——同校地におけるいづれかの学校または大学の教養課程もしくは専門課程の移転等適当な方法をすみやかに考慮すること」という認可条件を付けたからである。

これを受けて本学は評議会の中に教育制度を検討する小委員会を設けて、校地問題を含めて今後の女子大学のあり方を検討した。これを契機に、田辺校地利用問題が評議会・教授会等でたびたび話題になり、このことを本格的に討議する場として、昭和四十七年「田辺校地検討委員会」が設置された。二年後の昭和四十九年一月には「田辺校地利用委員会」に改組し、新たなメンバーによって、田辺校地利用問題の討議を深めていった。同委員会は田辺校地利用に関し一定の結論を得、同年六月答申した。答申は昭和五十一年度に短期大学部を田辺校地に設置するということが骨子であり、引き続き家政学部の改組移転・学芸学部に新学科を設置するという将来計画をも示したものであった。田辺校地利用に関し、はじめて具体的提案がなされたこの答申は、学内のあらゆる機関で審議検討に附された。短期大学設置問題については「短期大学設立検討委員会」が設置されるなどして具体的検討に入ったが、諸般の事情からして実現のはこびには至らなかった。

短期大学の設置問題に代って、「新学科検討委員会」が昭和五十三年十月に発足する。そして、一年六ヶ月に亘る審議を経て新学科設置の方針を決定したが校地問題がネックなり、に文部省の了承を得ることができなかった。

学問研究の発展、科学技術の急速な進歩と大学に対する社会の要

請の多様化に即応し、教育研究の質的向上を図るためには、学部・学科の改変や、新たな学科の設置等その教学条件の整備は必須の条件で、そのためには校地問題の正常化、即ち田辺校地の利用が大前提であるということが全教職員に現実の問題として認識されてきた。翌五十六年九月には再度「田辺校地利用検討委員会」を発足させ、正面からこの問題について取り進むことになった。同委員会は討議の結果、短期大学の設置など本格的な利用の方向を打ち出した。これを受けて五十七年七月十四日の教授会は(一)、校地問題を正常化するために田辺校地を利用する。(二)、利用の具体案を策定するための委員会を設置するという決議を行った。本学の田辺校地利用問題はこれにより本格的に動きだした。

全学教授会の決定を踏まえて発足した「田辺校地利用委員会」は①校地問題の正常化、②本学の教育研究機関としての今後の発展、③財政的基盤の安定化の三つの観点から審議を行ない、(一)、将来田辺校地への全学移転統合(一〜四年次の授業)を目指し、その第一段階として一・二年次のすべての授業を原則として田辺校地で行う。(二)、学芸学部を改組し、文学部と音楽学部とする。文学部には英文学科のほか、新たに日本文化学科を設置する。音楽学部は声学科・器楽学科・理論音楽学科とし定員増を行う。(三)、短期大学部を設置し英米語科と国際教養科(日本語日本文学字として設置)を置くという答申をまとめ、これが翌五十八年二月一日の全学教授会で承認され、田辺キャンパスの開学が具体的な日程にのぼり今日を迎えることになる。ふり返れば昭和四十二年、この問題についての討議をはじめてから十五年の歳月を費したことになる。

三項目からなるこの基本計画は長い歳月をかけて検討してきた過去の諸委員会の成果のうえに立つものであり、本学教職員の叡智の結晶である。それ故にこの答申が冒頭で述べている『本学にとって三項目からなるこの計画は創立以来の画期的な構想であることは言うまでもない。このような計画を間断なく実現していくためには、本学のすべての教職員が一体となってその遂行の責を負わなければならない。現状に対しても勇気をもって検討を加わえ、不合理や無駄の解消にあたるべきである。今後予想される種々の困難にもかかわらず、この計画を策定したのは来るべき二十一世紀に向けての本学の姿に大きな夢と希望を託したからである。未来の展望を開くべく時期を逸することなくこの計画が実現されることを強く望みたい』という決意を田辺キャンパスの開学を前にして、しっかりと確認したい。

確かに実施段階でのこの二カ年、種々の困難に遭遇した。理想と現実との狭間で苦悩する日々が続いた。限られた財政の中で当初描いた施設・設備への夢は消えていったものもある。しかし、これらの多くは当初から予想されていたことであり、初めて経験する大事業である。試行錯誤の繰り返しは今後も続くであろう。

田辺キャンパスの開学という大事業は今その緒についたばかりである。全教職員の協力が現在ほど必要な時はなく、この全学協力体制が新しい田辺キャンパスの将来を左右するものであり、この協力体制ができた時にはじめて田辺キャンパスの開学は本学が、いや全同志社が二十一世紀へ向って力強く歩み出す時であると信じる。

(女子大学学務課長兼田辺校地利用準備室事務長)

# 女子大の田辺移転に就いて

富 家 宏 泰

二十年前と言えば今年大学に入学して来る新入生の多くが生れた年である。この年昭和四十一年同志社は正式に田辺校地移転の意志決定を行い、第一次土地売却が完了する。

これより先四十年には理事会に於て「田辺校地に関する基本方針」が決定されたが、私は既に此の時点で幸運にも唯一人部外者ではあるが、建築の専門家として、秦理事長、上野大学長のお伴をして、草深い、真夏の田辺町校地候補地を視察した。当然の事乍らその当時は現地は全くの荒地で、南傾斜のなだらかな丘陵地帯であるが、身丈にも及ぶ灌木と雑草の中を、敷地境界の標識を求めて歩いた。

秦理事長はもとより上野学長も、すでに私の現在の年を越えておられたと思うが、この時から何年か後に、此の地に、新しい同志社が生まれる事を固く信じておられるかの様に、熱い眼差しで、まるで青年の様に現地での抱負を語り続けられた。「行く行くは三十三万坪程になるが、開校の時には恐らく少し狭いのではないかね。」と秦理事長が言われた言葉が強く印象として残っている。

私は当時既に、今出川の学生会館、新町学舎等の設計を手懸けていた関係で、秦理事長先生から特別に御好遇を受け、田辺移転に就いても私的な御相談を受ける事が再三であった。

恐らく当時は、今出川、新町校地の狭隘さが、教育、研究に支障を来し、戦後の新しい時代に対応出来る体制の整備充実が緊急な要件ではあったであろうが、それにもまして歴史ある名門大学の何れもが課せられた、大学設置基準による校地の拡充計画が、中心校地周辺に於て困難であり、加えて近畿圏整備法の制定によって、大都市での校舎増築が、事実上不可能になったため、急きよ、郊外に校地を求めた事も理由の一つであった筈である。

一人の建築家が、一つの大きなプロジェクトに二十年に涉って、かかる事が出来たのは極めて希有の事であり、同志社の田辺校地移転は、私の壮年期の精神史の一部とも言えるのである。

昭和五十一年迄の十年間は陰の存在として、殆ど表に出る事はなく、然し、確かに此の眼で、此の体で田辺移転にかかわって来た。色々な事があった。僅か二十年の間に、田辺問題だけに締つても、

積み上げては崩し、書いては消して来た、同志社と言う巨大な組織とのかかりあいの中で、一体私は誰と本当に田辺に就て語り合えばよかったですであろうか。

特に秦先生が亡くなられてからは、何をどう考えたらいいのか分からなかった。然し、それでも田辺問題は、バルチザンの様に執拗に隠密に検討され、計画されていた。私は近代日本の歴史と共に歩んで来た同志社程の大学が、その運命を左右する大事業と言える大学移転の問題に就て、何故正々堂々と討議されないのか、と幾度か疑問に思った事があった。

然し、戦後の大学が経験した異常な大学紛争の病理を考える時、この不毛の時代に、辛抱に辛抱を重ねて、大学機関が大方のコンセンサスを得た上で、今日の成果を見るに至られた事を考えると、私の考えの浅さを反省せざるを得ない。

先にも書いた様に、私が学生会館、新町学舎、光塩館、図書館その他の新築工事の設計を手がけ、田辺校地移転に就ても、最初から深く関係し、全体計画の立案から、今回又女子大学の移転設計監理を担当する事が出来たのは、建築家として全く光栄の至りである。

昭和四十二年には早くも、南北線の東北側が女子大校地となり、此の場所に運動場が建設され、今出川校舎の一部を施設として移築する工事があった。此の運動場造成工事は今回の女子大移転工事に大きな影響を与える事になった。

同四十六年、南北、東西主幹線道路の拡幅及び校地内の造成工事が行われ、引続き、教職員住宅の造成が行われる。此の教職員住宅の敷地に就ては、後に国際高校創設の時点でその可否に就て論議さ

れたように仄聞するが何としてもこの長い期間では色々な不都合があっても止むを得ないのではないか、改めて二十年前に秦理事長が、「どうも二十万坪では狭いんじゃないかな」と言われた事が思い起されるのである。

土地購入後十年間は全く水面下の動きであったけれど、そして、私は一体同志社は田辺問題に就て何を考え、どうしようとしているのかと疑問に思い、それでも、本部閉鎖の中で極秘裡に、事務所を移転させ乍ら一步一步慎重に、困難な地味な作業を続けられた関係教職員の事を思うと、私等部外者の苦勞など、何でもなかったのだと思へて来るのである。

田辺校地購入から校地移転への計画は学校法人同志社として創学百年に命運をかける大事業である。

この大事業に、この地を新らしい創生の場所と卜した、秦理事長先生の先見の明と共に、私が先の十年の間に垣間見た、田辺移転にかかわった人達の人間模様は正に長篇のドラマである。既に学園を去った人、或は故人となられた人もあろう。そして、若い日の情熱をこの田辺移転に集約し、夜のふけるまで談論風発した人の中に今静かに花開く開学を見守っている人もいる筈である。

ともあれ私は建築家として、一つのプロジェクトの発端から完成まで、二十年の長きに涉って個人としてかわり合う幸を得た。大きな組織や役所ではそうはいかない。役所や大組織ではエスカレーターのように人事が移動する。

恐らく、私の様な個人事務所であったからこそ、私は此のプロジェクトの本質を追及する事が出来たのであろう。

昭和五十一年には、富家建築事務所と日建設計が、正式に田辺校地の設計者として決定し、翌五十二年には『田辺校地整備計画』が大学評議会の承認を受ける。いよいよ設計のスタートである。

然し乍ら、用地を校地に変える造成工事だけでも三年もかかり、初めの工学部と正課体育関係の移転構想から、大学移転の手順等に大きな修正が加えられる。加えて五十七年以後、女子大学内に短期大学部の新設、音楽学学部の大増員全面移転等の抜本的な計画が決定したため、私は正式に五十八年、女子大学田辺計画の設計者として選任されたのである。

私は今此処で二つの事を述べさせて戴きたいと思う。

一つは、今我々建築家は、高度に発展したと言われている日本の社会の中で、非常に苦境に立たされていると言う事である。今日の文明社会の中で、建築の設計及び施工の技術は夫々高度に発展をとげて来たが、果して、設計と言う精神活動に正当な評価が与へられているであろうか。建築の施工に就ては完全な設計図書が与えられたなら、後は指定された数社による競争入札により、適正な金額に落札されてしかるべきである。然し、無形のものから、有形の物を創りだす橋となる設計を単に設計報酬の多寡に依つて決めようとする近年の動きに、私達建築家は困惑しているのである。幸い学校法人同志社に於ては、大学、女子大学共、特名によって建築家を選定され、大いに法人としての見識の高さを示された事に對し深い敬意をささげたい。

第二に、女子大の今回の計画に就て、建築家として、是非御願して置きたい事がある。

それは、四月に田辺の女子大が開校された時、多くの人達が氣付かれる事であろうが、当分の間此の校舎配置に中心となる建物が欠除している事である。私共は、設計の段階で此の事を幾度も提案したが、現段階では諸般の事情で許されなかった。現在食堂となつてゐる一番貧弱な二階の建物は、将来実験実習棟となる。然し、三転してその場所には女子大としての図書館が予定されていたのであるが、果して此処にその時に図書館が、現在考えられている規模で建てられるのであるらうか。

近い将来図書館の必要度が様替りする様であれば、あの場所に建てられる建築は女子大田辺校地の眞のシンボルとならなければならぬ。

実習等は校地内の他の場所へ移す事も可能である。若しふさわしい建物の予定がないのであれば、あの場所には、何も建築しない方がよい。そして、何百年か年ふりた、楠か、櫻の大木を植えるのである。建築の配置には中途半端は禁物である。折角出来上つた新校舎の目玉となる重要な場所である。画龍点睛を欠く事のない様お願したい。

(佛富家建築事務所代表取締役社長)

# キャンパスの建設をめぐる

小栗 武 男

## 一、着 工 前

昭和五十九年十二月、近鉄興戸駅を降りて徒歩で約十五分、冷い北風を心地良く受けながら広大な同志社田辺キャンパス建設予定地に立った。全面積が約百ヘクタールといわれる敷地はさすがに広い。造成工事の完了した山肌が建築工事の着工を待たびているように、法面のところどころに群生するススキが静かに身を風に任せていた。建築費約二百億円、三十数棟の建物が一年間の工期でこの地に建設されるようとしている。

同志社大学の建設は、設計監理を日建設計

さんが担当され、これをABC三区に分割、同時に、同志社女子大学も富家建築事務所さんの設計監理によって着工される。A工区を大林組と戸田建設が、B工区を熊谷組と清水建設が、C工区を大成建設とフジタ工業が、そして、同志社女子大学を竹中工務店と鹿島建設が、それぞれ共同企業体で工事を施工することとされた。A工区には、図書館、研究室棟、事務管理棟、特別教室棟、実験実習棟、宗教センターが、B工区は教室Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ棟、文化系ボックス棟、保健管理棟が、C工区には、食堂ラウンジ棟、多目的ホール、講堂兼体育館、第二体育館、合宿棟、体育研究棟が主な建物となっている。

昨今では、二百億円のプロジェクトは大規模とはいえ金額的な面では取り上げて珍しい工事ではないが、これを一年間で消化するとは密度の濃さにおいて高度な施工計画と、その実行が要求される。一日に数百台の生コンクリート車が行交い、千数百名の建設作業員が、それぞれの技能を発揮しながら日々各自の目的を達成していく。タワークレーンが空を旋回し鉄骨を建て、ブルドゥザーが土を動かす。これから始まる一年間の学舎建設の壮大なドラマを想いながら一歩一歩建設予定地を踏みしめて歩いた。空は冷く青い、思わず武者ぶるいを覚えた。

## 二、起工式と工事説明会

昭和六十年一月九日、起工式が現地で挙行された。林田京都府知事をはじめ多数の御來賓の御臨席をいただき、敬虔なオルガンの音に導かれ厳かに、各界の注目を浴びながら、式は進行していった。京阪奈学研都市第一クラスターと位置づけられた同志社田辺キャンパスは昭和六十一年四月開校を目ざして、ここに建設の槌音が響き渡ることとなった。

明けて十日、建設業者八社の施工担当者は、工事準備のため仮設事務所を設置や建設する建物の配置を確認する縄張りを開始した。

本工事着手には京都府の建築確認が必要であるが、これが暫く時間がかかるこのことで許可され次第、スムーズに施工できるようと、施工計画の立案、施工図の作成、労務管理体制の確立、下請業者との打合せなど内部の業務体系を充実させていった。

一方、大規模な工事を施工するにあたっては京都府、田辺町ともに、隣接する地域の方々に工事説明をするよう行政指導がなされており、これに基づき、近接する行政六区の区長さん宅への挨拶をはじめ、多々羅区、普賢寺区、草内区などの公民館で工事の概要や工程、資材搬入のルートなどを御説明申し上げ、工事施工への協力をお願いして廻った。地元の方々からは初めて経験される大規模工事に対して、一種の不安や、危惧、そして期待が交錯した質問や要求が出され、建設に伴うトラブルを起さないよう強く要請されつつも、なごやかに、さすが宇治茶の本場だけあって美味しいお茶をいただきますながら多くの

助言や御支援をいただいたときには心あたたまる思いがした。

工事説明会の要請は田辺町建設委員会に及び、さらには田辺町立幼稚園、小学校、中学校のPTAと先生方が組織されている育友会からも、特に学童通学路と多量な工事大型車両の搬入経路について真剣な質問が出された。確かに工事現場に至る道路状況は、その交通量に比して狭く、ここに大規模工事に必要な多量的大型工事車両を運行させるとすれば問題がないとは言えない。

我々も当初現地を視察した時点で、この件を管理の重点の一つとして取組み、工事施工にあたっては工事車両の時間帯の分散と搬入経路の分散、さらには一日の工事車両数の制限を図ることとした。最盛期には六百台に及ぶ通勤車両並びに生コン車以外的大型資材搬入車両は原則として午前七時半までに現地に入場させ、退場は午前九時以降とすること。生コンクリート車は一日最大四百台（二千立米）を上限とし、搬入経路は三方向に分散することなどによって、交通渋滞に拍車をかけないよう、そして通学時間帯における工事関係車両数を最少限にとどめることに多くの注

意をはらうこととなった。

### 三、木津川と山城地方

昭和六十年二月十九日、京都府から建築確認が認可された。各工区とも一斉に本工事に着手した。建物の基礎工事のためユンボが堀削した土をダンプが運ぶ、大工がコンクリート型枠を作製する、鉄筋工が鉄筋を組立てる、土工が足場を組む、土工がコンクリートを打設する。一日にして数百名の作業員が動員され、各職種の作業手順に従い工期を軌道に乗せるため作業の安全を確認しながら活動が開始された。誰の目も輝き、額の汗を拭おうともしない。

四共同企業体の各責任者は同志社田辺校地施工協力を組織し、工事車両調整、工区間工程調整、防災協力体制など頻繁に会談を重ね、全工区が歩調を合せ一丸となって無事工事を完成させるため、胸襟を開き忌憚のない意見を交わし合った。

その頃、木津川に漁業権を持つ木津川漁業組合から、キャンパスに設置される汚水処理場から排水する水量や水質について説明を受

けたい、との申し出があった。処理場はキャンパスの南側、普賢寺川ぞいに建設され、普賢寺川は木津川にそそぐ。

この要請に答え、田辺町の会議室において、同志社、日建設計、大林組、竹中工務店の関係者が木津川漁業組合と話し合うことになった。話し合いはその後数回に及んだが、下水を多量に排水することによって河川の水質が富栄養化するチッソ、リン含有量の基準値をさらに下廻るものとされた、とする漁業組合側の主張を同志社側が認められ、処理機能アップを図ることなどをもって話し合いは円満に解決した。

田辺町をはじめ、ここ山城地方は公共下水道施設が計画途上である。このため各河川の自然を保ち、大阪の飲料水である淀川の水質を守っていくためには、大規模な開発にあたっては私設の処理場建設が不可欠の条件となっている。地元区長さんや議員さんの方々の会話の中においても、この問題が話題となることも多かったが、これに加えて、河川対策についても確固たる意見を出されていた。

山城地方、特に木津川の左岸（西側）に広

がる平野は木津川の川底より低いといわれている。田辺、精華、木津と府道八幡木津線を見ると、ところどころに天井川が見られる。

この地区の丘陵地帯に降る雨水を直接木津川に排水するための人工的に造られた川である。昭和二十八年、綴喜、相楽郡で二百二十一人もの犠牲者を出した南山城水害以降、山田川をはじめ各河川は順次改修されてきたが、丘陵地帯に大規模な開発が始まれば樹木におおわれている丘陵を削り取ることとなり、大雨が降れば一時に流れ出る水量が増える。このためキャンパスの造成にあたっては調整池の設置や普賢寺川の改修、その他応分の費用を負担されたとのことであった。

田辺校地に計画された陸上競技場、ラクビ一場などの体育施設用地（第四工区）の開発は田辺町と綴喜郡西部土地改良区との間で防賀川流域の樋門ポンプ設置をめぐって長年未調整であったため、開発事前協議の段階で、行政間での調整を待たなければならなかった、という経緯はあったが、関係者の方々の同志社の学生さんのためにと精力的な御努力を得て昭和六十年十一月に開発申請が許可され、本年一月より造成工事が着手された。

昭和六十年の梅雨は例年になく長雨であった。工事施工には雨は不要である。「土方殺すに刃物はいらぬ、雨の三日も降ればいい」

空を恨めしく眺めながら工期的な面でイライラした日々を過ごしたが、それにも増して神経を尖らしたのは、キャンパスは建設途上であるため敷地には雨水の排水路が完成されていない、ここに五十ミリもの雨が降れば鉄砲水現象が生じ附近の河川や田畑に土砂まじりの泥水を流す恐れがある。くる日もくる日も雨量計をながめながら、土のうを多量に準備し、二十四時間体制で全校地の法面を監視するなど、各工区の責任者は工事の指揮と防災活動で多忙な日々を送った。

ともあれ、今後、京阪奈の丘陵地帯に学研都市が開発されるようとしているが、道路や交通機関、公共下水道施設、河川改修など前提となる課題が山積していることをキャンパス建設に参加させていただき身をもって体験した。

#### 四、学生さんを迎えよう

その後は比較的天候にめぐまれ、工事も急

ピッチで進捗し、各建物それぞれの形ちが造られ、山城の丘陵に秋風がそよぐ頃、レンガ色のタイル貼りが始まり、初雪を見た十二月、電気の本受電、水道のメーター設置など設備工事も着実に進み、室内も天井、壁、床と千数百名の職人の手で仕上げられていった。明けて六十一年一月、建物はほぼ完成し、府の建築検査、消防検査、エレベーター検査と、検査の日々の中、学校さんの引越しの打合せ、献堂式の打合せ、外構工事の追い込み、仮設事務所の徴収計画と毎日気の抜けない充実した日々が続いた。

どの顔も、事を成し遂げようとする気概が漲っている。日も暮れ、仕事を終え、コップ酒にまかせて交す雑談も四月に開校されるキャンパスの姿を思いうかべて花が咲いた。

一万名もの未来を築く学生が神の愛を受け、学び、集い、鍛え、巣立っていく姿を。この人々の学舎を、広場を、グラウンドを、そして道を、我々は造らしていただいた。

この喜びを与えて下さった同志社の皆様、御指導を賜った諸官庁、御支援をいただいた地元の方々、全ての人々に心より感謝いたします。

学舎は今、何もなかったように静かに存在している、延三十万名に及ぶ作業員が築いたこの学舎、騒然とした建設のドラマを知っているのは今はあの屋根根でありこの壁だけとなった。

舞台の主役は変る。真打ちはあまたの逸材

### 『池袋清風日記——明治十七年——』

編集・発行同志社社史資料室

明治十八年六月に、同志社英学校邦語神学科を卒業し、同志社女学校教員、同志社図書館司書をつとめた池袋清風が、日々の出来事を克明に記録した明治十七年の日記全文が、このほど翻刻・刊行された。

清風のこの日記の原本は、大正十三年に清風の遺族から同志社へ寄贈されたもので、松浦政泰著『同志社ローマンス』のほか、『同志社五十年史』、『同志社百年史』などの編纂の際に一等資料として活用されてきたが、全文の翻刻ははじめてである。

学生生徒の修学、伝道をはじめ寮生活、教員（外国人教員を含む）の動静などが、これほど克明に記録されている例は、目下のところ同志社には他にない。空前絶後の

となる学生達だ。

同志社さんの今後の発展も、このキャンパスが担うものと確信し、いつまでも輝かしいキャンパスとして可愛がっていただきたいのと祈念いたします。

（株式会社大林組同志社田辺工事事務所、所長）

リバイバルの様相（三月）、新島襄校長の二度目の外遊への旅立ち（四月）、徴兵令改正にともなう学内の動揺（一月～三月）、卒業式（六月）、彰栄館の建設（七月～九月）、キリスト教演説会とその妨害、その他、重要な記録が少なくない。

清風在学中から桂園派の歌人として知られており、寮の彼の居室での和歌指導の模様や、歌人との交友の記録は、近代文学史の資料としても価値をもつものである。この明治十七年に清風から和歌の指導を受けている寮生には、大西祝、安部磯雄、湯浅吉郎、三輪礼太郎、滝能武太らがいる。文人の筆になるだけに、記録の固苦しさは余り感じられない。

上・下各一〇〇〇円  
取扱い・同志社収益事業課  
（電〇七五―二五一―三〇三七）まで

# 女子大学田辺校舎建設をめぐる

式典が進むうち、この伝統ある、同志社の新しい計画に参画できた喜びと、責任の重大さを、ひしひしと感じ、後世に残る立派な建物を、ご期待通り、完成しなければならぬと、決意を新たにされた。

## 工事の概要

女子大学及び、新設される女子短期大学の建設は、この広大な敷地の一角、約七ヘクタールに、五棟延べ、二万四千方米の建物が建設される。六十一年四月開校の、絶対条件に対して、建物は六十一年一月末、外構工事は二月末に完成引渡しの契約であった。最大の課題は工期である。短工期とは云え、少しでも余裕をもって、完成しなければならぬ。本工事は自信をもって望めるが、周辺地域、近隣、交通等、他動的要素による支障が、もっとも懸念される所である。

当初の計画から、土地取得、開発行為等、ここまでに至る、関係者のご苦勞は、並々ならぬものであったと、頭の下がる思いである。

## 明 道 俊

すれば、相当な突貫工事が予想された。

### 起工式に際して

六十年正月明けの、一月九日の朝は、風はやや凪いでいたが、地は凍り、霜柱は立ち、身を切るような寒さであった。二十余年にわたる田辺への移転構想は、幾多の変遷を経て、いよいよここに、実現の運びとなり、晴れの、起工式が挙行された。

式典は、関係者多数出席の中、莊重な、オルガン奏樂、賛美歌斉唱、聖書朗読、祈禱と、おごそかに、進められていった、静かな中にも無事着工された喜びが感じられた。

### 野兎の運動場が一年後には学びの殿堂に

五十九年十二月に、同志社女子大学建設工事の、ご下命を頂き現地を訪れた。

田辺丘陵の広大なキャンパス用地は、ほぼ造成は行われていたものの、茫洋として、寒風が吹き荒れ、草むらのあちらこちらには、野兎の落としたアズキ玉が、転在していた。遠からず彼らも、新天地を捜さなければならぬいだらう。

約一年後に完成する建物群の輪郭は、ほぼ画かれてはいるものの、その規模、工期から

## よい建物の建設をめざし

建物は完成された時点に於て、見ただけでは、一般には、それほど良否はわからない、そのグレードと、仕上り精度ぐらいいではなからうか、真によい建物かどうかは、その施工中における、プロセスの中で、その節々における、品質が、コストが、工程が、安全が、どうであったかと云うことで、決まるものであると思う。

完成時には、杭も、基礎も、躯体工事も、殆んど表面には表われない。この隠れた期中における、品質が、基準通り確保されていたか、コストはもともと経済的であったか、工期は、予定通り進んでいたか、又、安全に於ては、怪我もなく無災害であったかが、もともと重要な事であると思う。

このプロセスの中で、すべてが充たされてしっかりした総合品質の基盤の上に立って、完成した建物こそ、真によい建物といえるのではなからうか。

完成後、使用された建物が、快適で、クレームもなく、五年、十年と経過した後に、始

めて、建物の良否は、評価されるべきであると思う。施工は一時的であるが、建物は、永久である。我々は、このことを肝に銘じて、このやり甲斐ある、ビックプロジェクトの施工に、当らなければならぬ。

### 工事の施工方針

工事の基本方針として、まづ品質(Q)コスト(C)工期(D)安全(S)のすべてを満足するべく、QC活動を展開する。

内外勤の連繋はもとより、作業所員、作業員の末端に至るまで、すべてが、その部署の立場に於て、参画する、いわゆる(TQC)活動である。

品質については、施工中の品質を確保するため、特に重要な品質に対して、その目標を設定し、具体的に、各分野に於て活動させる。根気よく、常に意識の昂揚につとめながら、進めることが肝要である。

コストについては、品質を確保し、かつコストの低減を計るためには、いかに無駄を無くし、工事を施工するかが課題である。優良業者の選定、早期発注、施工の省力化、工程

の厳守等が大きく影響する、協力会社も共存共栄でなくてはならない。

工期については、特に工期の厳守である。

本工事は、標準工期より、一五〜二〇%の短縮率である。期中特に躯体工事の遅延は、後の仕上工事を大きく圧迫するので絶対に許されない。「土方殺ずに刃物はいらぬ、雨の十日も降ればよい」と云われたものであるが、雨も風も関係ないハードな工程表を、作成した。

安全については、まづ「全工期無災害達成」が絶対目標である。建設業は全産業の中でも、危険率の高い業種である。安全施設の充実、完備は勿論のことであるが、作業員一人一人が「自分の身は自分で守る」という自覚がもつとも肝要である。事故が起つてから対策を検討するようでは手遅れである。「転ばぬ先の杖」常に事前に危険を予知して対策を講じておかなければならない。

作業所の環境は常に整理整頓を心掛け、「明るく、楽しく、働きやすい」職場作りにつとめる。「きれいな職場から、よい仕事が生れる」のは必然だからである。

多くの業種が多数稼動するため、特に、責

任範囲を明確にし、かつ「人の和」はもっとも大切にしなければならぬ。

## 作業所の組織

作業所の組織は、作業所長以下副所長、事務長、主任、担当係員、で構成される。この傘下に、労務、外註、資材納入等、各業種の協力会社が参画する。

業種は約四〇種、一六〇社、延稼動人員は約六万人、延労働時間は約五五万時間になる予定である。各社は、それぞれ作業主任者（職長）を配備し、これが「職長会」を編成し、諸々の運営にあたる。

## 建設業の今昔

建設業は、古い体質の業界とされていた。依然として、古い体質が残っている面もあるが、近年、徐々に改革されてきている。

土建屋は、土木建築業者に、下請は、協力会社に、親方は社長に、世話役とか樺心とか云われた物が職長、作業主任者となった、職人は作業員と呼ばれ、〇〇工で人格も上った

ような気がする。大工は大工、土方は土工であり、あまり変りはない。但し、塗装工など例にとれば、やはり「おーいペンキ屋さん」の方が親しみやすい。タイル工、電気工等皆しかりである。なかなか、古い体質は抜けきらない。

建設業は一般にあまり聞かれない職業や用語がある。コンクリートを破壊する「斫り工」などあまり知られていない。古いビルの解体や道路工事等で、ブレイカーの騒音を発生しているのは、皆この斫り屋の作業であるが、これも我が業界にとっては、なくてはならない商売である。コンクリートの型枠の取外しを専門にやっている「バラシ屋」（解体工）など、名だけ聞いたら、殺られそうであるが、これも特殊な商売である。見苦しいコンクリートを打って、がっかりしていたらこれをきれいに化粧する「修正屋」もあるから有難い。「洗い屋」（洗い工）も建物をきれいにする商売である。

用語では、やはり衣食住にかかるとのものが多し。アリ継ぎ、イナゴ、サル類、犬走り、馬ふみ、雀口、千鳥に大タコ、エビ樋、カニ面戸、アンコウ等動物に関するものが多い。

作業員が出勤したか確認をするのを「出面」（でづら）を調べると云う。所謂、面を出したかどうか調べることで、今だに使われている。

## 工事の施工

六十年二月十九日。待望の建築確認許可が下り「GO」がかかった。溝を持って待期していたので、翌日から直ちに着工した。

施工はすべて図面が基本である。設計の基本図を元に、計画図、施工図等作成する、図面の枚数は数千枚にも及ぶ。

事前計画、図面等、早期に進めていた為、工事は順調に進むことができた。

地盤がやや軟弱であった為、杭打ち工事があつたが、無音、無振動のオーガー工法によるため、周辺に影響を与えることなく、比較的にスムーズに施工することができた。

杭打後基礎及び一部地下工事も順調に進み、四月初旬には、各棟共、地上に姿を現わして来た。この頃から、資材揚重用の、クレーンが立ち並んできた。T型のいわゆる「トシボクレーン」が旋回するようになって、作

業所も、いよいよ活気が漲ってきた。沿線走る、近鉄電車からも、その活況が見られるようになった。

一階から二階へと各棟共上階へ立上ってきた、一フロアーの躯体工事は約一カ月程を要し、このタクトのくり返して上階へ進む。

コンクリートを打設する日は、大型の生コン車が、はげしく往来する。一日に約五〇〇㎡のコンクリートが打ち込まれる日もあった。

八月末から九月にかけて、各棟、続々に、コンクリートを打上げ、躯体工事は、予定通り完了した。木造で云う、棟上げが完了したことになる。

本年の天候は、やや異状に近く、六月は雨が多く、八月は干天の猛暑が続いた。机上では、スムーズに進んでいるが、夜打ち、朝馳けの繰り返しで、所員、作業員の苦労は、大変なものであった。

躯体工事が上階へ進むと、下階より、仕上工事が入ってくる。この大工事の仕上工事となれば、又大変である。前工程から後工程にスムーズに引継がなければ、工事は停滞する、一つ段取りを誤ると、後に大きく影響す

るので、少しも気が抜けない。さまざま、内装、総タイル張りの外装も順次終えて、十一月から、十二月初旬にかけて、クレーンや足場の解体が始まり、建物の偉容が、次々に表われてきた。色に苦労した、外装タイルも、落ちついた格調ある表情を現した。

十二月末日までの工程は、ほぼ予定通り進捗し、一月は最後の仕上げを入念に施工した。完成間近に行われる。数々の検査も、無事パスする事ができた。

建物とマッチしたアプローチから、庭、広場、植樹等、外構工事も終えて、二月末日すべての工事を予定通り、かつ、作業所目標を達成して、完成することができました。

### 竣工に当り

広大な丘陵地に調和した、格調ある学舎群を見る時、感慨ひとしおのものがあります。

竣工間近か、一羽の野兎が、キャンパス内を右往、左往して跳びはねて行つたのが、何か印象に残っている。

厳しかった諸条件を克服し、今ここに立派に完成した建物を見ると、今までの苦労も、一度に吹き飛んで、この記念すべきプロジェ

クトに、参画できた喜びと、誇りが溢れるのみである。工事に携った皆々が同じ感想に浸っていることと思います。我が全員一丸となって、汗と情熱をそそいだ、同志社女子大学は、永遠に残り、益々躍進されることでありましょう。

学校ご当局始めご関係各位のご支援、ご協力に対し厚く御礼申し上げます。

(同志社女子大学田辺キャンパス建設工事・竹中工務店・鹿島建設共同企業体作業所所長)

